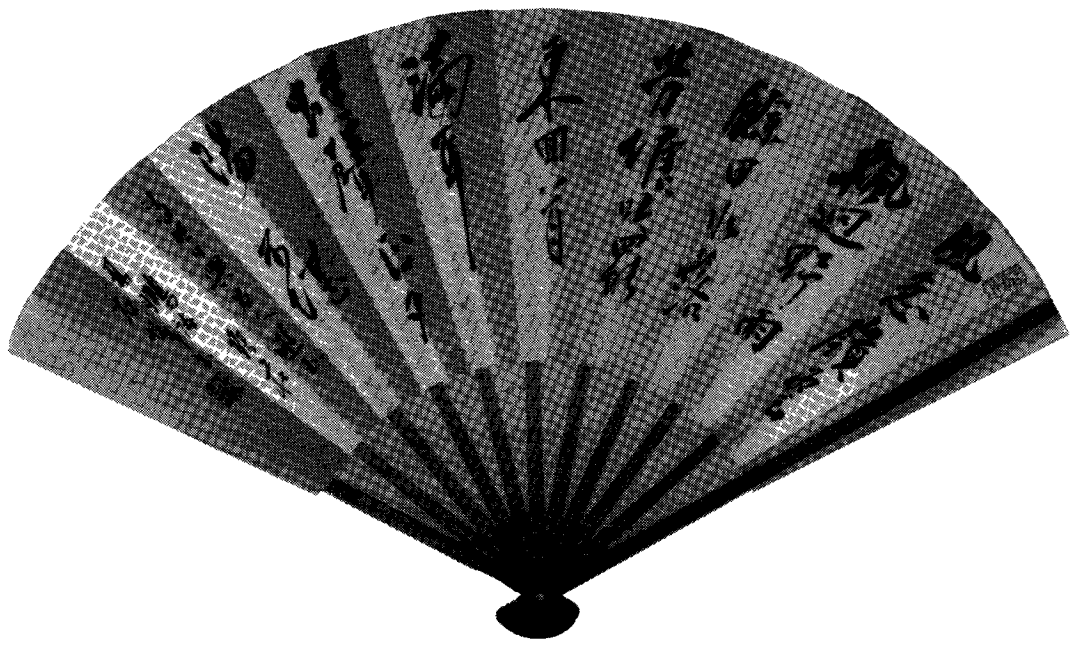


書 心・荒 鷺

No.27

福岡大学学術文化部会

書道部・書心会



卷 頭 詩

手を切られたら足で書こうさ

足を切られたら口で書こうさ

口をふさがれたら

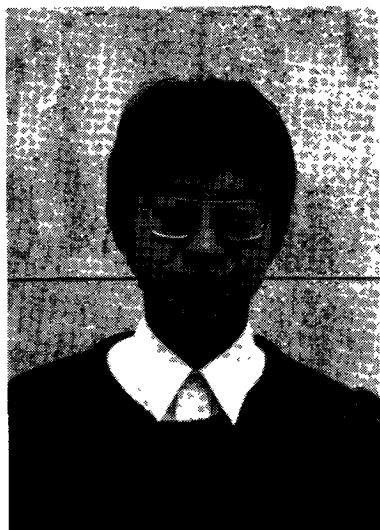
鼻の穴で歌おうよ。



講師 赤木 石掃



部長 小西 高弘



幹事 木下 晋



会長 柴田 一夫

目 次

赤木石掃先生書	1
巻頭詩	2
目次	4
序	7
第三十一回七隈祭展示作品	8
……昭和六十一年度書道部活動記	
……クリスマスパーティー	18
……追い出しコンパ	18
……春季合宿	19
……新入生勧誘週間	20
……新入生歓迎コンパ	21
……学術文化部主催ソフトボール大会	21
……ウォッシュアップン訪日（書道部）	22
……学術文化発表週間	23
……夏季合宿	24
……県展強化練習	25
……前期試験	25
……第三十一回七隈祭	26
……第二十六回西日本高等学校揮毫大会	29
……福岡学生書道連盟関係	31
……まとめ	33
……特別寄稿	
……クラブの活性化 自覚すること	34
……書心会々員の皆様へ	34
……学生として、今想うこと	34
……自由投稿	
……書道部部长	小西高広
……書心会会長	柴田一夫
……常任幹事会幹事長	西藤拓史
……法学部一年	林英樹
……僕と書道部	35

クラブの活性化 自覚すること
 書心会々員の皆様へ

書道部部长
 書心会会長

小西高広
 柴田一夫

学生として、今想うこと
自由投稿.....

常任幹事会幹事長

西藤拓史

僕と書道部
 私の考える事
 揮毫大会への参加
 出逢い
 四回生

法学部一年
 商学部二年
 薬学部一年
 商学部三年
 法学部四年

林英樹
 岸原貞弘
 榎崎栄子
 中川統博
 平田聖子
 岩井弘一
 大谷薫

「二十歳にて思うこと」
 「月の光」によせて
 極限

経済学部二年
 人文学部三年
 法学部四年
 商学部一年
 経済学部二年
 人文学部二年

鬼頭雅人
 中村修二
 原浩志
 大谷薫
 岩井弘一
 平田聖子
 中川統博

のちの想いに
 ふあいと
 戯言
 プロレス
 ハレーの日

法学部四年
 商学部一年
 経済学部二年
 人文学部二年
 経済学部二年
 法学部四年

石田陽子
 井上憲司
 照本英治
 前田秀樹
 鶴原哲英
 正木喜美子
 新開祥子

書道部に入って
 「これから」
 夏の気配
 僕の好きな中国
 アールグレイをモーニングコールに

人文学部一年
 薬学部三年
 人文学部二年
 商学部二年
 商学部一年
 法学部一年

北本正範
 新開祥子
 正木喜美子
 鶴原哲英
 前田秀樹
 照本英治
 井上憲司

Christmas Time in Blue
 僕は車です
 「これから」
 「ひまな方だけ読んで下さる」
 自由な日

法学部三年
 人文学部三年
 法学部四年
 経済学部一年
 経済学部三年

桜井茂之
 田中香
 北本正範
 新開祥子
 正木喜美子
 鶴原哲英
 前田秀樹

「これから」
 「ひまな方だけ読んで下さる」
 自由な日

法学部一年
 人文学部三年
 法学部四年
 経済学部一年
 経済学部三年

石川憲喜
 田中英樹
 山下直子
 白糸林太郎

クラリネットのひとり言	法学部二年	中尾明子	49
気をつける	経済学部一年	新納賢悟	50
桃子ちゃん	商学部一年	木村浩太	51
時空を越えて	人文学部三年	真角寛子	51
書道部に入学して	経済学部一年	松山浩嗣	52
振り返って	商学部四年	山本順一	52
「いい人に、逢えるさ」	理学部二年	西本祐介	53
料理人の心	工学部三年	木下晋	54
今頃思うこと	商学部一年	滝川匡由布	54
「初 心」	商学部一年	山川ゆり	55
ポピュラー	経済学部四年	瓜生達哉	55
今	工学部四年	尾崎光義	56
原 通幸先輩さようなら			57
福岡大学学術文化部会書道部規約			65
福岡大学OB書心会規約			68
福岡大学学術文化部会書道部員名簿			71
福岡大学OB書心会名簿			74
昭和六十一年度・福岡大学書道部役員名簿			88
福岡大学OB書心会役員名簿			89
編集後記			90

序

この度、福岡大学書道部の機関誌であります「書心・荒鷲」を発売するに至りました事は、一年間の活動の成果を具体的な形で残し、今後の部活動の発展をより着実にする上で、誠に意義深く、慶びに耐えられません。

福岡大学書道部は、昭和三十四年六月に、同好会として創立し、現在では、部となり、二十六年の伝統を持つサークルに成り得ました事は、諸先輩方の絶まない努力と情熱の賜であり、深く感謝の意を表する限りであります。

本年度は、基本方針として、「書道部員としての自覚と部員相互の信頼をより高めると共に、サークル活動を理解した上での日々の活動に積極的に取り組む。又、その中で自己と部を認識し、人間形成、書技向上を目的とした、部員全員で創造する、活気あるサークルを目指す。」という方向を掲げ、様々な活動、行事を行って来ました。その為に、部員の意見を大切にし、活動の糧としたわけですが、最後まで目的を達する事は難しく、成し遂げる事が出来なかったのが事実です。しかし、基本方針を達成する為の今までの過程は、これからの書道部の発展の上で、糧となる事を確信しております。

組織が本来、生まれもった性格として維持存続、発展使命ということがあります。二十六年を経た現在、その長き伝統がある余り、それに甘んじ過ぎる傾向があります。

私共、福岡大学書道部は、この「書心・荒鷲」二十六号の発売を期として、大学に於けるサークル活動の原点に立ち返り、様々な歴史を知り、更に何をすべきか、その使命を持ち、学生らしい、活気あふれる書活動を通じて、一歩一歩、堅実に努力精進して行きたいと思えます。今後ともより一層の御批評・御支援を賜わりたく存じます。

最後になりましたが、「書心・荒鷲」二十六号発売に際し、多大なる御尽力を頂きました諸先輩方、関係者各位に厚く御礼申し上げます。

第31回七隈祭

展示作回

山本順一

東條...

中一丈日誰是晏賦人

法学部 四年 照本英治

漢陽名醫...

商学部 四年 山本順一

壽三歌...

法学部 四年 原 浩志

尾崎光義...

工学部 四年 尾崎光義

法学部 四年 田中英樹

天行有常，不為堯存，不為桀亡。君子居则觀象象天，動則觀象法地，自天祐之，自不可及。

経済学部 四年 瓜生達哉

夫君子之居也，或守其志，或從其時。君子居則觀象象天，動則觀象法地，自天祐之，自不可及。

法学部 四年 平田聖子

遠東在任來風教遠洋漸方也。有德者居之，無德者失之。君子居則觀象象天，動則觀象法地，自天祐之，自不可及。

工学部 三年 木下 晋

惟道惟道在抱不長。君子居則觀象象天，動則觀象法地，自天祐之，自不可及。

経済学部 三年 白糸林太郎

天行有常，不為堯存，不為桀亡。君子居則觀象象天，動則觀象法地，自天祐之，自不可及。

人文学部 三年 大谷 薫

夫君子之居也，或守其志，或從其時。君子居則觀象象天，動則觀象法地，自天祐之，自不可及。

商学部 三年 中川統博

遠東在任來風教遠洋漸方也。有德者居之，無德者失之。君子居則觀象象天，動則觀象法地，自天祐之，自不可及。

人文学部 三年 真角寛子

惟道惟道在抱不長。君子居則觀象象天，動則觀象法地，自天祐之，自不可及。

商学部 三年 前田英樹

天賜愛使祀春漢將無勿逃尊親節九思
無初云親死存留有心一身兼苑並老會筆的
官女多非言誠人前二服裝追飲罪 中中

法学部 二年 中尾明子

默雲雲... 法學部二年 中尾明子

薬学部 三年 正木喜美子

蘇東物... 薬学部三年 正木喜美子

経済学部 二年 井上恵司

城壁戰謀若涌泉威羊踏賈
和旋面縛歸死還師振旅諧

人文学部 三年 石川憲喜

相慶多... 人文学部三年 石川憲喜

経済学部 二年 岩井弘一

和旋面縛歸死還師振旅諧

商学部 二年 北本正範

春... 商学部二年 北本正範

人文学部 二年 石田陽子

鮮... 人文学部二年 石田陽子

人文学部 二年 新聞祥子

新聞祥子

此乃... 氣教育...

人文学部 二年 新開祥子

張... 手... 心... 意... 氣... 神... 骨... 肉... 筋... 脈... 絡... 經... 絡... 通... 貫... 氣... 血... 盈... 溢... 神... 采... 奕... 奕... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕...

理学部 二年 西本祐介

此乃... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕...

商学部 二年 岸原貞弘

此乃... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕...

経済学部 二年 鬼頭雅人

此乃... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕...

此乃... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕...

法学部 一年 藤井隆之

五湖霜氣清

経済学部 一年 山下直子

此乃... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕...

商学部 一年 田中香

此乃... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕...

商学部 一年 滝 匡由希

此乃... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕... 志... 氣... 昂... 揚... 風... 采... 奕... 奕...

法学部 一年 林 英樹

新學の道は、
正しく進めば、
必ずしも、
成功は、
あるべし、
と信じて、
努力せよ、
と激励する、
言葉に、
感動した、
ので、
ここに、
書かれた、
。

商学部 一年 木村浩太

青松勁枝姿
凌雪傲霜
種出枝葉
常遠上

商学部 一年 中村修二

紅葉滿山
秋色宜人
是時心曠
神怡
。

薬学部 一年 榎崎栄子

人生の道は、
まっすぐに、
進むべき、
。

商学部 一年 山川ゆり

根多疑有私
故法對口之
存舉自非
譽譽藏春
春寒竟思
。

經濟学部 一年 新納賢悟

此處立學派
宗旨多
。

經濟学部 一年 松山浩嗣

忘形忘慮
志行貫心
。

人文学部 一年 鶴原哲英

楊柳栽
。

賛助作品

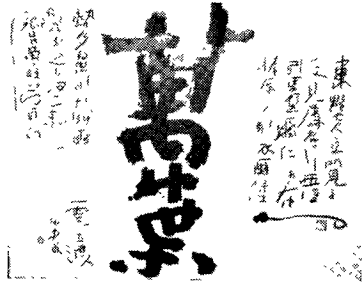
講師 赤木石掃先生



前崎恒春（44年度卒）



徳久政機（43年度卒）



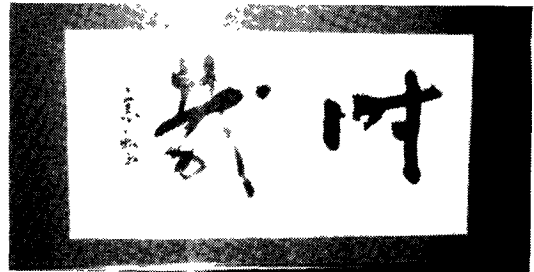
荒尾記史朗 (51年度卒)



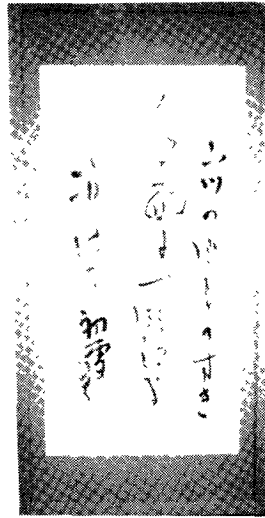
山村昌次 (51年度卒)



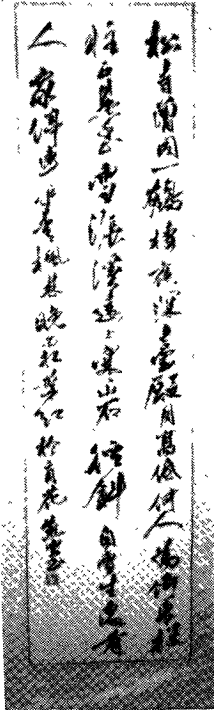
中村純一郎 (58年度卒)



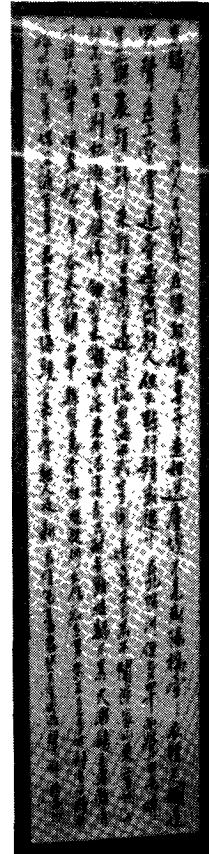
満生憲親 (58年度卒)



松本直人（58年度卒）



石橋正隆（59年度卒）

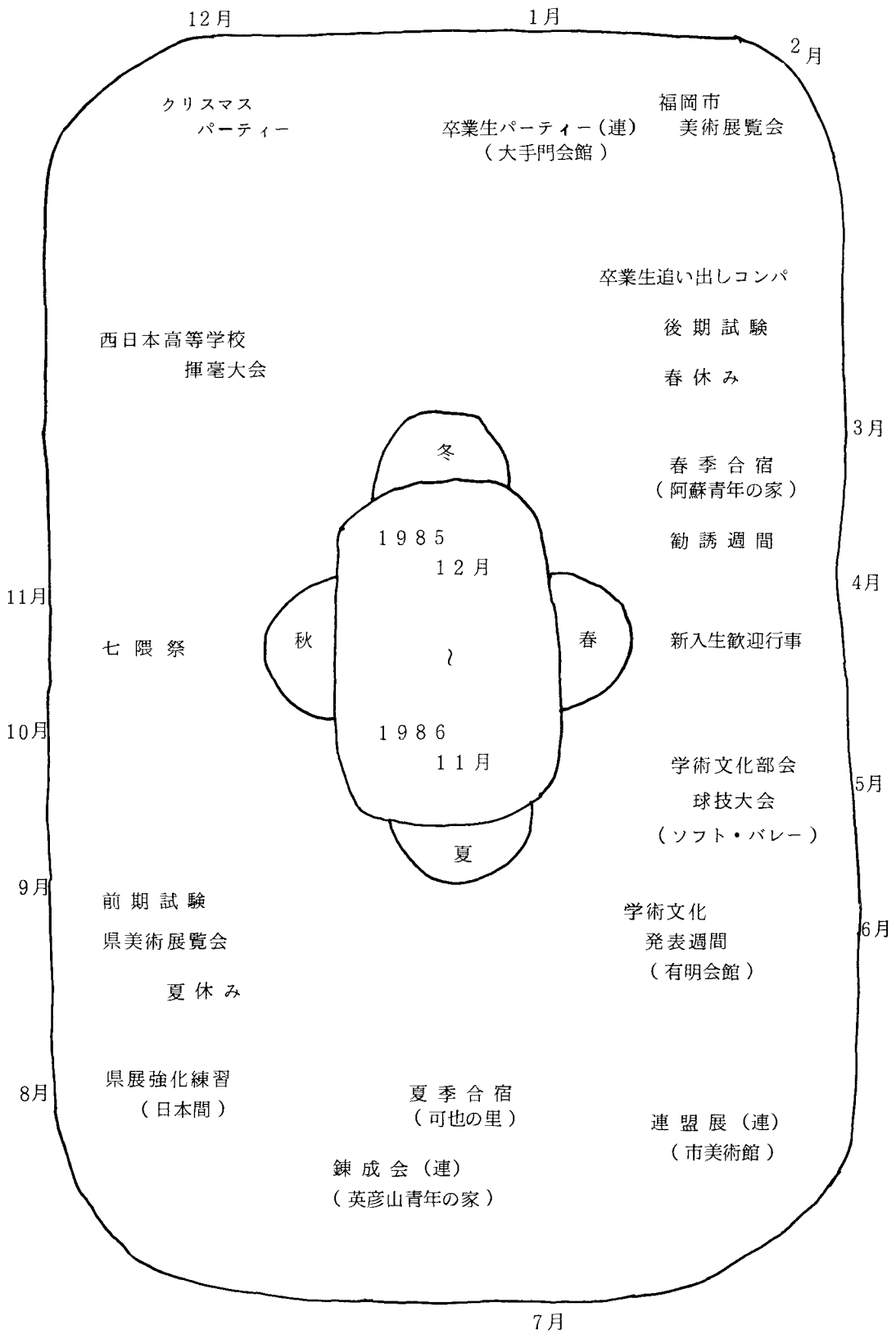


市川初江（59年度卒）



藤代裕之（60年度卒）

書道部この一年間の活動記



クリスマスパーティー

十二月二十一日(土) 福岡の街中がクリスマス一色に染まり、我書道部はというと、やっぱりクリスマスに染まり、みんなが楽しみにしていたクリスマスパーティーが始まる。場所は「十人十色」小じんまりとして、まあまあのお店ではないだろうか。部員のドレス・アップした姿、テーブルの上に並んだ御馳走、ケーキ、クラッカー、そして、クリスマスと言え、忘れてならないもの、そう、サンタクロースがやって来た。このサンタ、神松寺のセブンイレブンから衣装を借り、そのままの格好で、トナカイならぬバイクにまたがり、天神の現地まで来たというから、庄巻である。袋の中から皆で持ち寄ったプレゼントを配る。中を開けて、歓声を上げる者、大笑いする者、何歳になってもプレゼントはいいものだ。

司会者の進行により、部員の芸の出番である。カラオケで自分の世界に陶醉して歌う者が多かった中、一年生(当時)の男子は、生バンドの演奏を披露、喝采を浴びたのだった。次の企画はディスコだ。テーブルを壁側へ寄せ、フロアーいっぱいを使って飛び跳ねた。軽快なディスコミュージックのリズムあり、ムードあふれるチークあり、うまい者あり、きこらない者あり……

盛り上がったところで、全員で歌を歌い、パーティーは幕を閉じた。

ラブ・ミー・ドゥー

六本木心中

天使のウィンク

ジャンプ

ケア・レス・ウイスペア

翼の折れたエンジェル

一足早いけど、本当に楽しいクリスマスだった。

追い出しコンパ

先輩—いい響きである。何処に行っても先輩はいるのだが、我が書道部の先輩は、一味違うんじゃないだろうか。それも四年になると二味ぐらい違ってくるのである。例えて見れば、書道部での、楽しさ、苦しさをいやというほどわかっている、書道部の生き字引とも言おうか……。

そして、この日を迎える。いつも大変お世話になった先輩が、感謝の意を表し、名残りを惜しみ、門出を祝うのである。それが追い出しコンパだ。追い出しコンパの前には、なぜか心はずむ。やはりいいものである。(卒業生にとっては、少し恐いものに感じられるかもしれないが)

今年の追コンは、中央区渡辺通りの料亭「高砂」で開かれた。卒業生一名、在校生二十数名という、近年稀に見る追コンであった。卒業生は、皆なご存知の藤代裕之先輩である。藤代先輩と現書道部員の関係は、切っても切り離せない。それくらい、部を中心になって引っぱってこられた、すばらしい先輩であった。

追コン当日、全員名残りを惜しみながらコンパは進んでいく。形にと
らわれずに、話をし、催し物がだされていく。もっと時間がほしい、と
誰もが思ったことだろう。藤代先輩から部へと、今部屋に掛かっている
馴染みの深い掛時計を贈り物してもらい、嬉しかったと同時に、一層
卒業が悲しいものになった。部員からは、赤木先生直筆の色紙を贈り、
またとない記念になったことと思う。また、西南学院大の同僚の方が、
かけつけてくれたことも、すばらしい思い出になったに違いない。

皆んないつかこういう時を迎える。良き思い出となるよう、頑張ってい
きたいものである。

春季合宿

マイクロバスは、筑紫通りを通り、バイパスを抜け、太宰府インター
から九州縦貫自動車道へ乗り、南下を続けた。目的地は阿蘇、国立阿蘇
青年の家である。

年間行事の一つである春季合宿は、この大自然阿蘇の真ん中に位置す
る、国立阿蘇青年の家で、四月四日から四月七日までの三泊四日の日程
で行なわれた。

四月四日、朝八時半に博多駅筑紫口集合。遅刻者を待って、バスに乗
り込み、マイクを回しながら目的地へ向かった。

この合宿は、夏の「書き込み合宿」とは違い、スケジュールに練習は
入っておらず、研修時間は、班別、学年別、男女別、そして全体という
各種の討論とレクリエーションで埋まっていた。



この合宿で討論を中心としたのは、
この時期、全員一つ学年が上がり、
一人一人が前の一年間を振り返り、
又前の一年間の書道部を振り返り、
どうだったかを全員で討議し合い、
今後に生かそうとするものであった
からだ。

昼過ぎに入所し、オリエンテーシ
ョンを済ませ、研修に入った。班別
討論二研修、夕食、それに青年の家
特有の夕べのつどい、自由交歓など
のスケジュールを済ませ、あつとい
う間に一日目が終わった。

二日目、この日は、レクリエーシ
ョンの目玉である、中岳登山を行なった。朝、食堂で弁当と水筒を受け
取り、ロビーに集合。二十分位、青年の家の方の説明を聞いて、いざ出
発。「阿蘇山爆発の危険はありません。みなさん、雄大な阿蘇の自然を
楽しんで来て下さい。」

さて、最初のうちは、普通の道を歩いて楽勝気分。ところが先へ先へ
と登って行くにつれ、とても道とは呼べない険しい坂道の連続。それで
もめげずに走り回っている元気な一年男子。最初から疲れてゆっくりし
ている若年寄部員数名。ここぞとばかりシャッターを押しまくっている
写真係、いやはや何だかんだとやっているうちに、いつのまにか頂上へ
……。さあ弁当、弁当、色気よりも食い気の我部員達。雄大な阿蘇の景



色などそっちのけでまずは腹ごしらえ。さあて弁当を食べ終え、それではゆっくり景色でもと思いきや、今度は菓子をほおぼる始末……。

そして、中岳登山より全員無事生還。次に夜の研修、班別討論へと合宿は進んでいった。ここで話は変わるが、この合宿で特筆すべきことが一つある。

それは、企業の新入社員研修と丁度重なり、異常な刺激となったのである。

五団体ほど研修に来ていたのだが、特別におもしろかったことは、トヨタと日産の二社の営業所の研修が重なっていた。

たことである。「お早ようございます。今日は、トヨタのみなさんとバレーボールの試合をして惜しくも負けました。今日は絶対勝ちます。」……これが朝の代表者の挨拶である。流石に自動車業界の一位と二位のことだけはあつた。他のオリエント貿易、岩田屋等の研修生のみなさんも、結構気合いが入っていて、我々は圧倒されっぱなしであった。

さて、色々なことがあつたこの合宿も、反省会、幹事総括、そして打ち上げへと進み、無事終了した。この合宿で討論したり、遊んだりしたことは、一つのステップにすぎない。ここで考えたこと、学んだことをいかにこれからのサークル活動に反映させるか、それがこの合宿の狙いであり、ここで出た問題意識をそのままにすることなく、少しづつ改善

していくことが部員の努めであると思う。

明日の書道部を目覚して

頑張っているよう！

新入生勧誘週間

昭和六十一年四月十四日～四月十九日

毎年のごとく六十一年春、今年も勧誘週間での新入生の引き込みが行われました。一年生二十人を目標に部員一丸となり説明に、ひっぱり精を出しました。ある者は、「ヒマに大学生活を送るなら何か賭けてみないか」と誘い、ある者は「連盟で友だちがいっぱいできるぜ」と誘い、又ある者は「いっしょに酒のもうぜ」と誘い、動機はさまざまなれども今年も十二人のピチピチ一年生が入りました。

初日、なんと書道部にはめずらしく女の子が一番手で入部しました。

初日は、女の子二人にとどまりましたが、一年生がイスにすわるたびに「ここでは何だからメシでも食いながら……」とメシに誘っていた二年生は「これでは金がもたん」としきりになげいていました。

中盤になると、はじめに勧誘した一年生が友達をつれて来ていっしょに入ろうと、さながら二年生以上のごとく書道部の説明をしている姿も見られました。このころになると部員のエンジンも全開になり、口も全開で説明にも熱が入ってきました。

後半になると、逆に一年生の方にあせりが見られ「とにかく何でもいから入ろう」とか「ちょっとこわいお兄さん方からにげ出して来まし

いから入ろう」とか「ちよっとこわいお兄さん方からにげ出して来まし

た」といってイスにすわりそのまま入った人もいる様です。

こうして勧誘週間も無事終り十二人入ったわけですが、勧誘週間が終つてから入った一年生もいる様です。

ここで教訓を一つ、一年生に説明する時は血液型、星座、出身校、学部学科、何でもいから自分との共通点を見つけてこちらの話に引き込むことだそうです。

来年もたくさん的一年生を入れてにぎやかな書道部にしましょう。

新入生歓迎コンパ

春、桜咲く。我が福岡大学にも咲き乱れるように、新入生が入学してきた。そして、書道部にも可愛い新入部員が入ってきたのである。いや、正確には、部員の絶え間ない勧誘によって入れたというべきだろうか？

この可愛い一年生が、少しくラブになじんできた頃に、歓迎の意をこめて、コンパが行なわれる。この日は、上の者にとっては、こよなく楽しみな一日である。なぜかって、まあ、ここでは理由をふせておこう。

今年の新歓は、ゴールデンウィークである五月三日に行なわれた。当初は、コンパを行なう前に油山に登り、オリエンテーリング、バーベキュー等計画していたのだが、その日は、あいにくの雨で、ボーリングに変更になった。クラブ員全員でのボーリングは、ひさしぶりだった。書道部は、以前運動系サークルに入っていた者も多く、ボーリングも皆な仲々の腕前である。最初に個人戦、次にペアを作ってゲームが行なわれ、外のじめじめした雰囲気を一気にふき飛ばすような熱気であった。個人

の部では、なんと200というスコアを出した、幹事木下が優勝、ペアでは一年生ペアの林・山川組が勝ち、一年生パワーを見せつけた。この後、片江の榎に於いていよいよコンパが始まり、一年生によっては、嬉しい一日となったようである。来年も行なわれるであろうが、いつまでたっても忘れられぬ一日である。

一年生よ、頑張れ！

学術文化部主催

ソフトボール大会

男なら誰しもスポーツを好む。それは、我が書道部にも当てはまる。

中でも皆なソフトボールは好きなのである。そして五月十一日学文会主催の大会が開かれた。普段は、書道に明け暮れている者も、この大会の一週間前は、毎朝練習に励む。この時ばかりは、どの部も負けじと練習するので、毎日場所をとるのが難しい。この時に活躍するのが一年生なのである。というのは、この場所とりは一年生がするのが恒例となっているからである。今までだと撤夜してとっていたのが、今年は規制により朝六時からとなったが、やはりこの苦勞なしには、ソフトボールは語れない。また一年生にとっては、この場所とりがお互いを知り、友情を深める場ともなっている。

「今年こそ一勝」の目標をもって練習がスタートする。書道部と言えば、昔は連戦連勝の強豪であったが、今では連戦連敗となってしまった。誰の心の中にも「勝ちたい」という気持ちがつこのり、練習も真剣なもの

となった。

そして当日、大雨の中、試合が始まった。相手はメルハーモニー部。書道部も、もちろんベストメンバーの起用だった。雨という悪条件の中、試合は、書道部が皆んなの真剣なプレーと応援に励まされ、先手先手を取っていき、十一対六でメルハーモニー部を振り切った。この時の嬉しさと感動は、今なお心に残っている。二回戦は、惜しくも速記研究部に負けはしたが、この試合は、部員全員を使い、皆んなで闘ったソフトだった。

この一勝により全員「やれるんだ」という自信がついた事だろう。次の試合では、優勝目指して、

書道部「ファイト！」

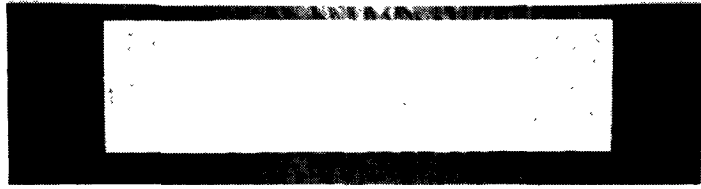
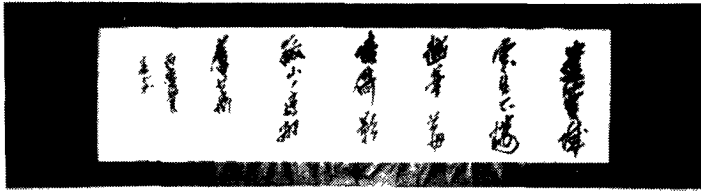
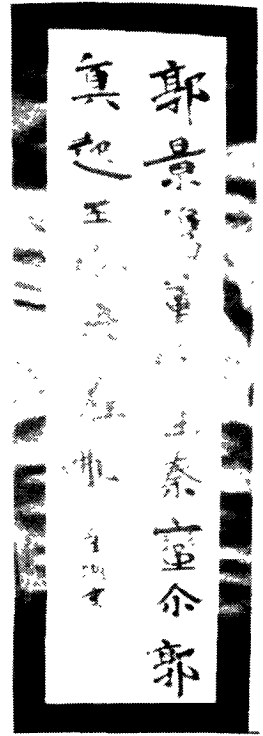
ウオッシュバーン訪日（書道部）

「カリグラフィ」これが「書道」の英訳である。五月二十七日（火）発表週間と連盟展の為の強化練習も二週目に入ったこの日、アメリカのウオッシュバーン大学から留学生がやって来た。有明会館1Fの日本間にて準備を行ない、待っていると、彼等は、隣の部屋で茶道を見た後、こちらの部屋へ入ってきた。

最初、英語研究部による、書道とはどんなものであるのかの説明が行なわれ、その後、我々の練習を見もらった。しかし、見るだけでは彼等もおもしろくないだろうということで、実際書いてもらうこととなり、一人づつ付いて教えることとなった。我が書道部としても、国際感覚豊

かな選抜メンバーをそろえていたが、なかなか苦勞していたようである。しかし、色々な面での文化の違いを肌で感じる事ができ、又、書道が日本を代表する伝統文化であるということが再認識することができた。そこで彼等に一言、サンキューノ





学術文化発表週間

学術文化発表週間は、我部所属している福岡大学々術文化部全体の最大行事であり、学術・文化の地域社会への普及、発展に寄与すること等を目的として行われている。我部もその中において書道文化の普及と地域社会へのアピールそして学術文化部会の総合的発展に寄与することを目的としてこの行事に参加している。本年度は六月十六日より二十一日まで行われ、我部は例年の一号館ロビーから有明三館ラウンジへと会場を移し、一年生は半紙、二年以上は半折サイズの作品を展示した。一号館ロビーでの展示には種々の問題点があり、それを少しでも改善しようと思ひ、常任幹事会の方へ嘆願書を提出するなど、努力の結果として今回の展示会場を確保することが出来た。今後も場所、情宣面での一層の努力を考えていきたいと思う。ところでこの発表週間に向けて、我部は強化練習を組み、部員一丸となって作品作りに励みこの行事に臨んだ。この発表週間の二ヶ月前に入部した新入生にとっては、何もかもが初めてのことである。展示会も、作品作りも、強化練習も、表装週間も……。このときの新鮮な気持ちをいつまでも持ち続けて今後の活動を行ってほしいものである。

夏季合宿

書道部である以上、書道の練習は不可欠なものである。その練習合宿が、夏季合宿である。この夏季合宿により、書技の向上はもちろんのこと、部員全員が、寝食を共にすることにより、連携帯を図っていくのである。

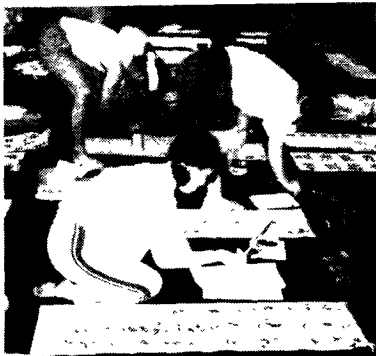
今年の夏季合宿は、夏真っ盛りの七月十四日より七月十八日まで、前原にある可也の苑で行なわれた。

夏季合宿で思い出されるのは、なんといっても愛情めしである。一日のうち約八時間練習という厳しい生活の中、練習のきつさよりも、めしを食う苦しさの方が後に残っているのである。それにしても我が書道部は、よくめしを食う。この夏季合宿に於いては、一日三回めし三杯近く食うのではなからうか。なんともはや、強い胃を持った連中である。

練習―一日約八時間。一日の三分の一である。一年生は、臨書中心、二年生以上は、創作を中心に行なう。今年も、半紙練習、早書き練習、席書会等をもり込み、バラエティーに富んだ練習を行なった。また最終日に、講師赤木石掃先生が来られ、席書会で創った作品を、批評、指導していただき、より有意義なものとなった。



レクリエーション―今年も、三日目の夜にきもだめし、花火大会、四日目の夜に茶話会を行なった。きもだめしは、月が出ていたので少し明るかったが、各所で悲鳴が聞こえ、暑い夏の夜を楽しんだ。花火も夏の夜にふさわしく、皆な子供にかえったような顔で楽しんでいた。茶話会は、最後の夜行なわれ、各班の出し物、個人芸等、燃えあがるキャンプファイアーの前でくり開けられた。そして最後に各学年男子対抗のスイカ早食いが行なわれ、楽しく幕を閉じた。このスイカはOBからの差し入れであったが、量の多いこと多いこと。どうもありがとうございました。この後、十八日の夜にコンパが行なわれ、苦しかった夏季合宿は終わり、長い夏休みに突入したのである。



県展強化練習

蟬がせわしく鳴いている。学校は夏季休業に入り、日頃の学生達のざわめきも消え、蟬の声だけが聞こえてくる。回りの空気は照りつける日ざしで暖められ、妙に蒸暑い。そんな環境の日本間で県展合宿の初日があけた。

今年の出品者は、四名と少なく、自分も出品するのは初めてである。県展サイズの紙で作品を創るのも初めてである。当然頭でイメージしていた通りの作品ができず、いやげがさして書いている途中で筆をほうり投げ、寝転がると古ぼけた広い天井が見えた。(当前の事だが)じつとながめていると自分がなんて心の小さいやつだと思ってしまう。「いやげがさした」ぐらいで投げだす自分が……。

また気を取直し書き続けることになる。時が経つにつれてその数は減っていくものの、仲々納得いく作品はできないものである。そんな不案も余所に作品締め切りの日は悪魔のごとく近づいて来る。赤木先生の自宅へ作品を持って行く数も日々が多くなる。そして、先生に見せると、今年「福大組は全滅」と手厳しい喝を入れられる。というのもそこに赤木先生が教えおられる他の文化サークルの人達も私達と同じ様に県展を目指している。その人達を見ていて、なぜ書道をやっているのかなあと考えると、答は一つしか出て来なかった。「書道が好きだから」。本当に楽しげである。我々の書く作品と他の文化サークルの人達の書く作品の基の違いが、大きく出た感覚にとらわれた。

合宿中は、日頃の部活動とは違い個人の書きたい時に書けばよい。日本間は蒸暑いし、決して環境がいいとは言えない。その中で書き続ける事のできる基にあるものは……。

結果としては、合宿に参加した中からは四回生の平田聖子先輩しか入賞できなかったが、短い合宿の中で、貴重な体験をし、書技も向上したと、自負しています。

前期試験

「ドタバタ、ドタバタ」まさにこの様な表現がピッタリの時。それが前期試験です。「コピーコピー」と教室、部室、コピー屋さんの間をめぐるしく人が走りまわっています。部室の中もいつもとは雰囲気の違い、他の学部の者には訳の判らない専門用語が飛びかい、黒板には「○さん○○のコピーお願いします」とか「○○さんへ、○○のコピーです。お食事の約束忘れないで下さい」などの文字がならび、黒板は一瞬にして白板と化してしまいます。

一年生が一人部室に入ってきました。元気が無いので聞いてみると、どうも試験が出なくておち込んでいる様です。カワイイものです。それにくらべて二、三年生は「やられたあ」と明るく入って来て「今日はもう試験が無いからボーリングにでも行こうか」と明るいものです。四年生は、やはり卒業がかかっているので真剣の様です。試験の中休みの過し方ですが、ボーリング、麻雀、ショッピング、デート、寝る、など人それぞれの様です。

ここで試験が終わって初めての部員の感想を聞いてみましょう。

「全部良かった。やった。大学の試験は簡単だ。こんなものを落すのは人間じゃあない。と強がりを言っはみたものの……勝負はやっぱり時の運ですね」

「なんて試験の期間が長いんだ」

「試験中は、いつでもどこでもお友達」

「試験は要領、コピー有るのみ」

「試験は、忘れたところにやって来る。これが無いと大学生活楽なもんです」

など様々ですがみんなが口をそろえて言う事が一つだけあります。それは、「後期があるさ」です。ちなみに後期試験後には、その言葉は、「来年があるさ」に変わっている事は言うまでもありません。



第三十一回七隈祭

十月三十日

七隈祭実行委員会の日頃の努力が通じて、初日、空は青々と晴れ渡った。

書道部のすくすく一年生と、猛烈四年生が仮装した姿を乗せたバスは、福大バスターミナルを天神に向け、仮装行列の旅に出発。

この後、二年三年は福大にのこり、展示の準備を開始することになるが、今回の展示に使った木わくに關しては、二年男子の血と汗がしみ込んでおり、二年三年の共同作業によっ一つ一つ組み立てられていったが、組み立てられて行く度に、感動をおぼえた。

あの福岡大学駐車場の深夜の作業では、ヤクザの様な学生の苦情に逃げ出した事、作業後の食事のラーメンに、にんにくをたっぷり入れ、次の日、人に嫌われる。

十月三十一日 展示開始

展示初日にさっそく前崎恒春先輩（四四年度卒）、川波崎嶇先生（現筑紫女学園短期大学書道部講師）が来られ、作品の批評等をしていただく。また他サークルの人達も来てくれるが、やはり、場所がわかりにくいとの声が多かった。

そして、夕方、明日からバザー開始ともあって、一年生はしこみに大忙しであった。先輩の家を借りて、しら玉を作り、あずきをにたり、立看を作った。下宿は、道具の荒れ放題、そんな中での準備は、墨の混っ

た灰色のしら玉を誕生させたりもした。(もちろんぜんざいには入れて
ません。)

十一月一日 バザー開始

すくすく一年生が独自で行った初めてのぜんざい屋、昨日の準備で、
寝むたい顔をしながらも一年生のバザー奮闘記の幕は切っておとされた。
客引きに精を出す者、調理に精を出す者、お金の計算に精を出す者、み
んなそれぞれの分野での活躍があった。目標の金額へ向けて……。

十一月二日 展示・バザー

赤木石掃先生に作品の批評をして頂く。その批評も、一つ一つの作品
をていねいにして頂く。今日一日で、一番うれしく思った事であった。

日曜日ということもあり、七隈の地は、人・人・人で埋めつくされた。
この期会をのがしてはなるものかと一年生の意気は増々上がっていった。

十一月三日 展示・バザー

最終日、バザーの方は、何んと
しても売りさばこうと必しである。
というのも売れ残ったぜんざいの
やり場がないのである。書道部の
人間は、しこみの段階からぜんざ
いとお友達になっているので、胃
がもたれて食べる気分さえ起ない
のである。

そして、少しぜんざいは残った
ものの売り上げは、目標の十万を
越えることとなった。



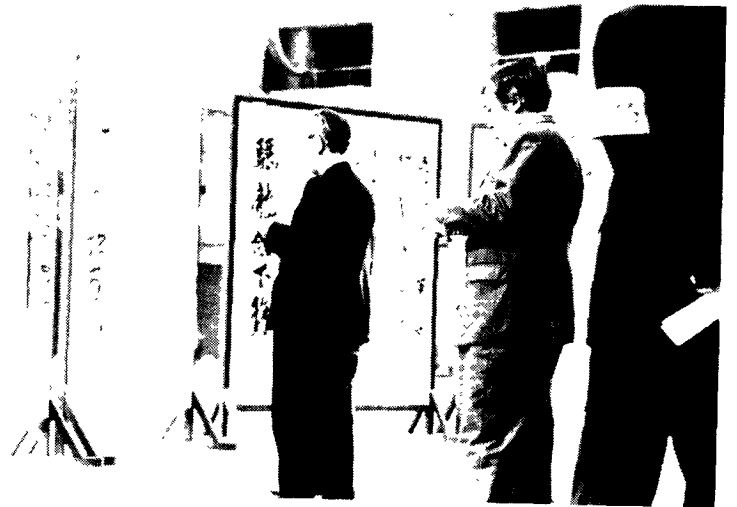
数十日かけての準備、実行委員制を取り、二年生をつけて七隈祭に臨
んだわけであるが、展示場所が例年とことなり、観客がわかりにくいとの
問題が上げられる。観客のほとんどは、書道をいそしんだ人達であった
と言えるだろう。何とかして一般の人達が来る展示会にするには……。
これが課題となる。

しかし、今回の展示会場は、まわりのお祭りの雑踏をさえぎり、美術
館に近い静けさの中で、観客に作品をゆっくり観覧して頂けたであろう。
観客数は百五十名を数えた。その中には、OBの先輩方があり、赤木
先生の文化サークルの人達があり、西日本高等学校揮毫大会に参加して
頂く高校の先生方、その生徒達の名前があった。

書道部に関係する人間関係の広さと強さをひしひしと感じた七隈祭と
考える。

そして、打ち上げでは、実行委員として数ある説明会に出席し、中心
となった二年生とバザーに日夜努力した一年生供々、ぐっすり眠れるだ
け、お酒をちようだいたした。一年生の三日間の血と汗と泪の結晶の売り
上げも、打ち上げで、たった三時間しかもたなかったのだ。この若き、
書道部員達には、いつまでたっても、お金は身につかないだろうなあ。





本年十一月十六日に、福岡大学第一記念会堂において、第二十六回西

第二十六回西日本高等学校

揮毫大会



本年十一月十六日に、福岡大学第一記念会堂において、第二十六回西日本高等学校揮毫大会が開催された。今年の大会は、九州山口五県にまたがる三十二校の参加、生徒数二百一名を数える盛大な大会となった。

尚、新企画として公開審査を行い、揮毫大会のより一層の充実を図った。公開審査の意義は何であるかという点、今までの大会では作品鑑賞という形で、揮毫終了後高校生に他校生の作品をみせ、勉強の場として活用していた。しかし、その作品鑑賞だけでは、いったいどんな作品が本当によいか解らないという点でまだ勉強の場としての効果が不足している。それを少しでも補い、また書道の審査というものがどんな形で行われているのかということ、実際に目の前で観ることが出来るということである。では揮毫大会は高校生にとっては何であり、主催する福大書道部にとっては何なのか。ここに高校生自身の声を例に挙げておく、「地区大会、県大会等、確かに種々の書道の大会はある。けれどまだ刺激が足りない。もっと強い刺激がほしい。そんなときに届いたのが揮毫大会の要項でした……。」――二十六回大会を迎える揮毫大会の永い歴史の中で、熊本県よりの初参加校、九州女学院高校の生徒の方の声である。我々はこのような高校生の素朴な声を大切にしたい。この大会をきっかけとして高校同志の書道を通じての交流が深まれば幸いである。

揮毫大会当日の朝、会場に初めて足を踏み入れたとき、言葉では言い表わすことのないはりつめた空気と緊張感、そしてその瞬間の感動を我々は大切にしたい。今後の大会の発展とより一層の充実を切望する。

第二十六回西日本高等学校

揮毫大会アンケート集計結果

今回の第二十六回大会では、初の試みである公開審査を行ったということもあり、十六項目にわたり高校生を対象にアンケートをとりました。そのアンケート結果をここに記します。

1. あなたは、いつごろから書道を始めましたか。

これは、七割が小学校から始めたというもので、次に高校に入ってから、中には幼稚園からというのも二、三ありました。

2. この大会をあなたは以前から知っていましたか。

知っていたというのと知らなかったというのが半分半分ぐらいで、初参加の学校や、一年生等は、知らなかったと答えた人が多かった様です。

3. 知っていたと答えた方へ、何でこの大会を知りましたか。

昨年も来たからや、先生に言われて、先輩についていった。などの答えが多く、中には姉も参加したから、という姉妹そろって参加というケースもありました。

4. この大会は、定期的にはどうですか、

大半がちょうど良いと答えてくれましたが中には文化祭のすぐ後だからずらして欲しいというものがありました。又寒いという意見もありました。

5. 揮毫時間について適当だと思われる時間をお選び下さい。

これは、二時間、一時間半、一時間、その他と項があったのですが、一時間半というのが五割強であと多字数の作品を書く学校の生徒は、二時間というのもあった様です。

6. 揮毫中の雰囲気についてどう思われますか。

静かが良い、静かすぎて緊張した。というのがほとんどで、あと見回りの人が多すぎるというのも多かった様です。

7. 公開審査を見られた方へ、あなたの作品が実際に目の前で審査されていくのを見てどう思いましたか。

緊張した、ドキドキしたなどの答が多かったようですが中には、残酷というのもありました。

8. あなたは、どのような練習方法でこの大会にのぞみましたか。

放課後の部活を兼ねた練習というのや、先生にみてもらうなどが多く、変わったものには日夜、血のにじむような書き込みをしたというのもありました。

9. あなたはどのような目標を立ててこの大会に望みましたか。

団体優勝、入賞というのが大半だったようです。

10. 二年生以上の方へ、この大会の優秀な作品は、展示会を催し展示しますが見に行かれたことがありますか、

いいえと答えた人が大半で昨年度の大会の授賞式に来た人以外は、あまり見に来ないようです。

11. あなたは今までにどのような大会、又は展覧会に出点されましたか。

県展、市展、地区大会、宮地獄揮毫大会、総合文化祭、近江神宮、全九州大会、に出品した人が多く、あと新聞社の大会、校内の作品展が多かったようです。

12. あなたは書道部員として参加されましたか、他にあればお書き下さい。

これは書道部員と答えた人が九割をしめました。

13. あなたは書道の展覧会に年、どのくらい行かれますか、展覧会名もお書き下さい。

二、三回と答える人が一番多くそのほとんどが県展と市展に集中しました。

14. 郵送出点形式と席書会形式はどちらがよいと思われませんか。

これは、半分半分ぐらいでどちらにも良さはあるようです。

15. 係員（福岡大学書道部員）への要望をお書き下さい。

親切でやさしかった、というのもありました。

16. あなたがこの大会で一番印象に残ったことをお書き下さい。

他の人が上手だったというのが多く、他には規則がきびしく緊張したというのもあったようです。

17. 今後、この大会に望むことをお書き下さい。

別になし、が多かったようです。中には、駅に近いところにして欲しいという難しい望みもあったようです。

高校生のみなさん本当にありがとうございました。

福岡学生書道連盟関係

我書道部と同じ二十七年の歴史を持つ福岡学生書道連盟（通称・福書連）福大書道部もこの福書連を構成するメンバーの一員です。

書技向上と親睦融和を二本の柱として成り立っているこの団体、我々福大書道部では学ぶ事のできない他大学の書風を学ぶ事ができ、又他大学に多くの友人を得る事のできる絶好の場です。中には、親睦融和が興じて将来の伴侶を見つける人も少なくない様です。

それでは、第二十六期の福書連の行事をふり返ってみましょう。

○リーダーズ・トレーニング・キャンプ

福大の裏山ともよぶべき油山の青年の家で十二月、二泊三日の討論合宿が行われました。討論に熱が入り立ち上がって熱弁をふるう者、声

の大きさに、となりの班にめいわくをかける者、又静かに人の話を聞く人、色々な人がいた様です。ちなみに福大生は一般に声が大い様です。

○卒業生パーティー

卒業生への感謝の意をこめて、今年は大手門会館でにぎやかしく行われました。最初は、明るい雰囲気が始まったパーティーも終りの方は、涙、涙の握手交換。

福大の卒業生は、一名だったので抱え





れない程の花束を持たれて連盟を卒業して行かれました。

○親睦会

入ったばかりのピチピチ一年生が連盟行事に初登場。まわりは知らない人ばかり。ハラハラ、ドキドキ、オドオドの一年は、いつ見てもカワイイものです。春日公園の広大な芝生の上で一日中食べて遊んで、踊って、楽しい一日を終えたころには、多くの先輩、他大学の一年生ともうちとけ、打ち上げの時は、飲んで、歌って、さわいで、先輩にかつがれて帰った一年生もいた様です。

○連盟展

ジメツとしてちょっと嫌な梅雨の季節、福岡市美術館という華やかな舞台で連盟展が行われました。福大書道部でも強化練習を組み、ひたすら書きつづけました。先生に「ダメ」と言われては又書き、それでもダメならまた書く。こうしてやっと合格した作品が飾られた時の喜びはひとしおだったことでしょう。ちなみに私は、ビールを二杯飲んで書いた作品が出来が良く、それを出品しました。リラックスして書くことも大切ですね。

○錬成会

下界よりも空気が澄んでいて、ちょっとすずしい英彦山青年の家。ここで四泊五日の書道の書き込み合宿、これが錬成会です。連盟行事の集大成とも呼べるこの合宿、福大書道部からも多くの部員が参加し、書道

に、遊びに、ゴハンに、ガンバッテいた様です。

この様に行事をふり返って見たわけですけれど他にも練習訪問など普段の交流も盛んです。これからも福岡学生書道連盟は福大書道部と共にずっと発展し続けていくでしょう。



我々第26代役員は昨年十一月より今日までその任につき、基本方針に基づき年間行事を行ってきました。

我々書道部は、昭和六十一年度第二十六代基本方針を次のように設定しました。

「書道部員としての自覚と部員相互の信頼をより高めると共に、サークル活動を理解した上で日々の活動に積極的に取り組む。又、その中で、自己と部を認識し、人間形成、書技向上を目的とした部員全員で創造する、活気あるサークルを目指す。」

つまり、部員に目的を持たせ、積極的に活動する中で部員相互の信頼を密なものにすることによって、活気あるサークルを目指し、活動してきました。部員が入部し、活動する上で目的があるように、集団である書道部にも目的があり、これを達成する為にも各人の積極的な姿勢が必要となる。

今年役員との連携の無さが目につき部員に多大な迷惑をかけた事は深く反省しているが、現在、自己中心的になり、本来のサークル活動の目的を見失っているのではないだろうか。

我々書道部は書道を通じて人間形成、親睦を深めるサークルです。このサークルを発展させていく為にも互いに相互批判、相互理解しながら先輩後輩の縦のつながり、同輩同志の横のつながりをより密なものとして、その中で目的に向け積極的に活動するべきであろう。

以上、基本方針を達成する手段として、日々の活動に加え、年間行事を置き、卒業生追い出しコンパ、春季合宿、新入生歓迎コンパ、夏季合宿、西日本高等学校揮毫大会を行いました。卒業生追い出しコンパ、新入生歓迎コンパは、それぞれの意義のもと盛り上がりを見せた。春季合宿に於いては、部の現状を見つめ、方向性を考え、討論を行ったが、具体的な方向性を見い出せぬまま一貫性のないこの場限りのものに終ってしまった事は反省すべきである。夏季合宿に於いては、書技向上を最大の目的として行っており、日頃のないバラエティーに富んだ練習ができた事は大変良かったと思う。今後、各人がこの場をもっと理解し、大いに利用すべきであろう。西日本高等学校揮毫大会に於いては、新たな公開審査を行ない、部員にとまどいがあったが、高校生が本大会に新たな興味を持たせた事は良かったのではないだろうか。しかし、今後新たな企画をする際には十分な検討を望む。各行事を通じて部員の参加意欲は高く、今後、その行事の必要性、重要性をより理解し、部員全体で盛り上げる決意です。

次に、我部の機関誌「荒鷲」の発行が遅れた事は深く反省すべき点で今後再検討すべきであろう。

加えて、我々は、書道部の一員であると共に、福岡学生書道連盟、学術文化部会の一員であり、これらの場も大いに利用し、人間形成、書技向上の糧としてより一層すばらしい書道部を築き上げる意志です。

クラブの活性化——自覚すること

書道部部长 小西 高 広

部員の懸命の書技努力にもかかわらず、書を書く心構えというものが弱いようである。青年期の書で特に重要なものは「むかっていく勇氣。」というものであろう。何に向かっていくのか。それは各人の志すところへである。はたして、部員は自分の志を持って、書に向っているのだろうか。

志のない人間に本当の道を求めることは出来るであらうか。志が大きければよいというものではあるまい。市井の民に徹することも志しであり、世界に向うことも志しである。それは各自が志すことであって、時代に流されていることに目覚めることであらう。ここから本当の自由の精神が波打ってくるであらう。自らの志に向って学を修め世界を動かしている法則を学びとり、その法則を認識するばかりでなく、変えていく努力を続けていくことが大事であらう。何の学問ぞや、何の人生ぞや。「輪読会」を進めたい。部員グループを作っても「輪読会」を進めたい。

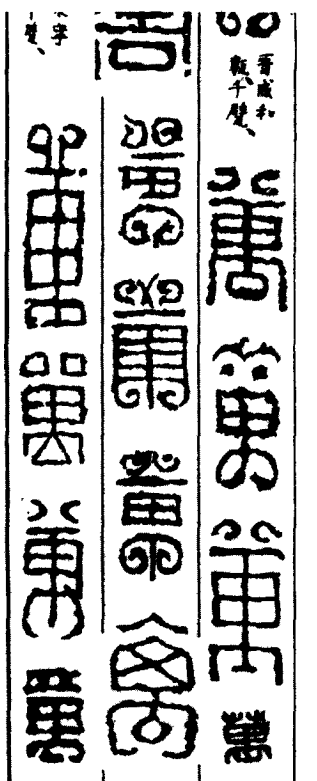
書心会々員の皆様へ

書心会々長 柴 田 一 夫

書心会々員諸氏、および現役学生諸君には益々御健勝のこととお慶び申し上げます。

皆様に御協力をたまわり、創立二十五周年を祝うべく『書道展』『書心・荒鷲記念誌発刊』『式典・祝賀会』を無事終了することができました。厚く御礼申し上げます。

さて、その時代時代の学生達が悩み苦しんで築いて来た書道部は、私共の歴史であり、消え去ることのない若きロマンであります。卒業後の社会生活は形こそ違え、走馬燈の如く走り去ってしまいます。在学中の四年間の思い出が突如として時をもどしてくれることもあります。



学生として、今思うこと

学術文化部会幹事長 西 藤 拓 史

社会の進歩・発展に貢献できる優れた人格を有する人材の育成——これは、大学の目的、社会的使命のひとつであることは言うまでもありませんが、では「優れた人格」とはどのようなものでしょうか。

私は、これを「知」「情」「意」「体」の四つで表わすことができると考えます。

先づ「知」とは、幅広い教養、深い専門的知識ならびに技術の修得のことであり、「情」とは、協調性、責任感等、すなわち身体の外に表われる感情の適正化のことであり、「意」とは、思考力、創造力、行動力等すなわち自主性を育くむことであります。また「体」とは、健康のことを示すものと考えられます。

人格形成とは、これら四つが充分に調和のとれた状態を示すわけですが、ここで考えなくてはならないことは、「知」と「体」については、我々学生自ら意識的に練磨できるとしても、「情」と「意」については、人から講義を受けたり、自分一人ではなし得ないものであり、これらは集団生活の中から意識的あるいは無意識に身体で学ぶ取るものなのであります。そして、そういったことがもつとも出来る場がサークル活動であると、私は考えます。

高度情報化社会と呼ばれる現代、氾濫する情報の中から、有益なものだけを自主選択していかねばなりません。そういった判断力・価値

感が誤まっていれば、それらの情報が無駄になるだけでなく、有害な情報におどらされ、目標を見失ってしまう結果となります。これはサークル活動にも充分あてはまるのではないのでしょうか。如何に我々をとりまく環境が変わろうとも、一人一人がしっかりとした信念を持ち、真の目標に向かっていくことが、もっとも重要なことなのであります。最後に、今後の書道部の御発展と、部員の皆様の御活躍を祈って筆を置きたいと思えます。

僕と書道部

法学部 一年 林 英 樹

僕が福岡大学書道部に入って約四カ月になろうとします。それまでのたった四カ月の間にいろいろな事がありました。

まず、僕が書道部に入部するきっかけになったのは、同輩のM君がM君の友達N君のところに行こうと言って、友達四人でN君のところに行き遊びに行き、色々楽しく話をしていたら、いきなりおでこの広い人が人って来ました。そしてその人と話をしていたら「おまえ書道部に入らんか？」と言われて、内気でおとなしい僕は、その人が恐しかったので断わりきれずに入るだろうという約束をしてしまいました。すると次にかわいい顔をした人（今の二回生の先輩）が二人来ていろいろ話を聞かせてくれました。

そしてそのおでこの広い先輩に勧誘週間の時に来いと言われてそこへ行ってみると色々な人がいました。みょーにおじさんみたいいな人、みる

からにわがままそうな人、その他諸々いました。そこに僕とM君以外にもう一人一年生の男の子がいました。その人はみよーに顔がごつくて強そうで恐ろしい人だったので僕は何か近寄り難いなあと思っていたら、その人は頼りなさそうな声で「せんばーい。」と言っているではありませんか。僕は何だこいつはと思って話してみると思った人とは違う人だったので、ほっとしました。

そして七月までの約四カ月間、総会では強引に某四回生に歌わされ、新歓コンパ、親睦会ではおとなしくしてたけど、強引に酒を飲まされ具合が悪くなりました。学内展前の強化練習も正直言って、きつくてやりたくないと思いました。しかし、先輩、同輩、先生、連盟の人はいい人ばかりです!?

だからこれからの四年間は、みんなと時に楽しく、時には真面目に書道に打ち込んで楽しい大学生活を送れたらなあ、と書いています。

私の考える事

商学部 二年 岸 原 貞 弘

今、私が考えている事は、つまらない事かもしれない。しかし、今の私には、これしか出来ないのです。それを「なぜか？」など考える事をしない私ですけど、私は私なのです。

ここで、私について少しでも理解してもらおうなど、考えないこともないですけど、少し文書に表わしてみたいと思います。

昔から、私は「なぜか？」と考える事をしない人だったと思います。

事実をそのまま受け取っていました。事実は事実だからしょうがないと思っていました。しかし、今の私は事実は、果たして真実なのか？という事を考えてるのであります。別に考えたからといって事実が変わるわけではないのですが、それをわかっていながらも考えずにはいられないのです。

こんな文書を書いてどうするのか？という考え方もありますが、今の私には、「これが私なのです」というほか無いのですから、しょうがありません。

今後、自分がどの様な方向に進むかわかりませんが、自分は自分なりの考え方で、(決して誤っている事を意地で通すのでは無く)歩んで行きたいと思っています。

揮毫大会への参加

薬学部 一年 檜 崎 栄 子

今回で二回目(書道部員としてはもちろん初めてですが)の揮毫大会が終わろうとしています。そこで、高校生として参加した時のことを思い起こしてみました。

一回目の参加の時、私は高校二年生でした。家庭教師(福大書道部OB)の先生の勧め(?)で気楽に参加に踏み切ったのはいいのですが、こわい(?)方々の見守られる中苦手な書道はやらなくてはいいけないし(当然ですけど)、先生の見張り付きですし、泣きたくなりました。

体は震えるにとどまらず、大きく揺れました。終ってしまっ、ほっと

したのはいいですが、作品観賞により、自分の力のなさにまた落ち込み、すくすくと帰って行きました。

そして、今回二回目少しは変わったつもりだったのですが、結局昔と変わらず、それどころか、弱くなっている自分に気付き、恐しくなりました。今回は、緊張のあまり気分が悪くなり途中で、十分程度抜けてしまいました。その為、充分に高校生の面倒をみてあげられず、本当に残念でした。でも、ほんの少しだけ、緊張を解いてあげられたような気もしました。が、自意識過剰でしょうか。

さて、来年以降も揮毫大会は開催されるでしょうが、私はどれだけ変われるでしょう。

「良い子になるぞ」と決心した今日は、荒鷲の原稿の最終べ切り日です。

表賞式も近づいて来ました。高校時代に行けなかった分、じつくりと観賞したいと思います。少しは目がこえたでしょうか。楽しみです。

出逢い

商学部 三年 中川 統博

勧誘週間の初日に入部して以来、いつの間にかやら三年生になっている自分に気付く。今、これまでの学生生活を振り返ってみると、失敗、失敗の連続で、ただもうがむしゃらにやってきたのだなあとそんな気がする。気持の上だけででも余裕を、と思いつつちっとも余裕など存在しなかった。そんな自分に、一つの大切な出逢いがある。彼は今年で二十六

才となり、色々な学生達と出逢い、そして互いに学び、遊び、泣き、笑い、怒り、喜び、そして共に成長し、現在の彼が在る。そういう自分も二年前に彼と出逢い、共に歩んで今日に至り現在の自分が在る。今思えば自分は彼から働きかけられるばかりで、学ばばかりで、果たして今までどれだけのことを彼に対してやってきたであろうか……。これまでは自分が彼から学んできた。しかしこれからは自分が彼に対し強く働きかけ、彼に教える番である。それを学生生活最後の思い出し、彼との出逢いを最大限に活かしたい。何もしなくても時間は刻一刻と過ぎていく。しかし時間は買えない。時間ほど人間にとって平等なものはない。自分にも、彼にも一秒は一秒、一分は一分のはず。ただその一分一秒の時間の重みを自覚しているかどうかで、彼にとっての一秒と自分にとっての一秒とに差が生じる。大切なことはその一分一秒をいかに生きるか、夢が実現出来るように、希望が実現出来るようにどう口を動かし、手を動かし、足を動かすか、今やっている動かし方で目的が達成出来るか……。どうか……。自分もすぐに四年生となる。じっくり考えながら歩んで行きたいものだと思う。

四回生

法学部 四年 平田 聖子

キャンパスのつつじも咲きみだれ、ひと雨ごとに緑濃くなる油山も目に映え、心地よい。まばゆい陽ざしをうけ、すがすがしい気持ちで、新たな学年が始まる。

毎年、この時期は、過去の一年間を振りかえって反省する。

生活のリズムが、ほとんど書道部の活動に治っているので、当然そのことで考えることが多い。ピチピチした肌となんとも不思議そうな目、おどおどした態度、いや今年をあてはまらないかな、というような後輩と話しているところちまで若がえってしまふ。

部室への入り方、言葉の使い方などにも、ちょっとした貫録が出てきたこともうれしい。

今年からが大変だ、大所帯な学年なので、意見がまとまりにくいんですよ、なんて相談されるのも今年が最後だ。

愚痴ばかりこぼしながらもいつも支えていてくれた同輩、感謝しています。

とても居心地の良いこの書道部には、たくさんの思い出があります。楽しかったこと、うれしかったこと、悲しかったこと、くやしかったことと、波乱万丈に過ごしてまいりました。ちょっと、抽象的な表現ですが、思い浮かべてみると、心暖まる限りです。

学生生活も残すところあと一年。

行く末が案じられる今日の頃ですが、自分の人生は、自分で開拓していくんだ、という気持ちを忘れずに、かつ人の心の優しさを大切に生きていきたいと思えます。



謙温

「二十歳にて思うこと」

経済学部 二年 岩井 弘一

もうすぐ二十歳である。人生八十年としてすでに四分の一まで達した訳だ。この世に生命を受けて以来二十年間、今まで何を考え、何を成してきたのであろうか。ただ莫然と生きてきただけであろうか。空を見上げて見ると、雲一つない青天である。あのはるかかなたに、広大な宇宙空間がある。宇宙の歴史に比べると、私の生きてきた二十年間など、ちっぽけなものだ。しかし、現に二十年間生きてきた「あかし」として、この世に「存在」している。

二十歳という人生の節目を、大学生活の中で向かえることに、一つの意義があるのでなかろうか。日々、学生として生活はしているものの、世間的に見ると、二十歳は立派な「大人」である。しかしながら、今の自分にそれだけの「自覚」「意識」「責任」があるのだろうか。就職し、社会人として生活しているのなら別ではあるが、「大人」でもなく「子供」でもない。そんな立場に立って生活しているのだ。少しくらいの失敗は許され、やりたい放題、学生だからという考えが、自分にも世間にもあるのではないか。なにもかも猶与された状態なのだ。経済用語の中に「支払猶与期間」というのがあり、その「猶与」をモラトリアムという。まさしく、現代の自分はモラトリアム人間なのだ。

ある大学の教授が「明日思い煩う人は、今日にエネルギーを思いっきり使えない。」とおっしゃったが、私は「明日に思い煩うなら、とこと

ん煩え、また、今日にもエネルギーを思いっきり使え」と考えたい。「モラトリウム」この時期こそ、思考錯誤しながら精一杯やれる時期ではないだろうか。

「がんばれ、モラトリウム人間」

「月の光」によせて

人文学部 三年 大谷 薫

月の美しい夜です。煌煌と輝く月は、ほぼ丸に近くなっています。

こんな夜は、部屋のあかりは消して、月明りをあびて、考え事をします。考え事といっても、意識と無意識の間で、ぼーっとしていることなのです。けれども、自分自身が、その月の光のように、純粹になつていくような気がして、いつまでもいつまでも、そのまま、時を過ごすことがあります。そんな時のBGMは、やはり、ドビュッシーの「月の光」にしたくなります。

近頃、ウラジミール・ホロヴィッツとスタニスラフ・ブーニンという二人のピアニストが来日、演奏しました。ホロヴィッツは、前回の来日の際には、さんざんの評をうけた演奏だったのですが、今回、母国ソ連に、何十年ぶりかで、郷帰りした後だったからか、音の乱れも少なく、やはり、ホロヴィッツと思わせるものでした。また、ブーニンは、若干十九歳にして、昨年ショパンコンクールで優勝した、新進気鋭のピアニストです。

先日、ブーニンの演奏を聴きました。スピード、力強さ、正確さ、す

ばらしいものでした。けれども、ひとつ不満だったのは、感情です。「月の光」は特に、好きな曲であり、自分のイメージがあるため、「ちがう」と思ってしまったのでした。十九歳の若者に異国の地で、二時間もの演奏をするうえ、さらに、注文をつけるのは酷かも知れません。けれども、彼がこの先、どのように経験を積んで、ホロヴィッツのような、その音色に酔うような演奏をしてくれることになるか、期待しているのです。

月の光が、ピアノの音色となって、私の上にこぼれるのです。

極 限

法学部 四年 原 浩 志

去年夏、日本一高い山、富士山を登山した。五合目まではオートバイで、それからは自らの足で登山したのだが休憩を取らず一気に登って約四時間かかった。六合目、七合目、八合目と続きついに最高峰に立つ、途中、苦しきのあまり引き返す人に何人もあった。そのような人を見ていて、たぶんそんな人は何をやっても同じ中途半端になるだろうと思つた。何をやっても苦しきはつきものだ。その苦しさに達した時、どうするかによってその人の価値が、また今後その人がどう成長するかが決まる。苦しきの極限を乗り越えられる人は必ず伸びる。また、その極限を、七合目に置くか、八合目に置くか、頂上に置くかでも違ってくる。去年富士山の最高峰に立った時、今度は、エレベーストに登りたいなと思つた。やはり目標は大きいほうがいい……………。

最近、利己的な人間が多くなつたといわれるが、自分のことだけで精

のちの想いに

商学部 一年 中 村 修 二

大学生活が始まって、早一ヶ月が経とうとしているが、「あゝあ、暇だなあ。」これが実感である。このことは、ある程度予想されていた事だが、実際こういう状況に立たされてみると、生活することの難しさ、言い換えれば、一日一日を手応えあるものにする事の難しさを痛感させられる。

こういう生活の中で唯一充実した時間を与えてくれるのが、月・水・金曜日の夕方四時半から行なわれる書道部の練習である。入部した翌日はもう退部しようとした自分がこんなことを言うのは恥かしい気もするけど、今は入部して良かつたと思っています。技術の向上はもちろんのことですが、それ以上に先輩方や、あるいは同輩の人達と接する事によって新しいものを吸収し、今まで持っていた狭い考えを少しでも広げられたらいいなと思うからです。しかし、この長い四年間（で済めば良いのですが……）を書道だけで終わるのも悪くはないけど、人生の中で最も自由に考え、行動し易い今、色んなことを体験してみたいと思う。（社会の表裏を知るバイト、見知らぬ土地をぶらっと訪れる旅、人生の縮図恋愛：etc）中でも今一番実現したいと思っていることは、海外を訪れる事。言葉の違う。不自由な異郷の地で一週間でも生活できたら、何ものにも替えられない自信と活力が湧いてくると思う。その為には今からやる事が沢山ある。たとえ夢が実現しなくとも目的意識を持って一

日一日を過ごしていけば充実した生活というものが送れるのでは、と思う。

夢を追いそれに見合う努力が出来る。これが若さの特権なのだろう。夢は大きい方がいい。この夢を追い続けられる四年間でありたいと思う。

ふあいとー

経済学部 二年 鬼 頭 雅 人

今年もまた、秋がやって来た。なんかズドンと暗い季節である。でも、秋の晴れ間は、とっても気持ちが良い。空がムチャクチャ高く見える。雲がムチャクチャすんで見える。律義にも、毎年毎年、秋はやって来ます。

この時期になるとふっといろんな事を思い出す。先日、久しぶりに高校時代の友人と会った。ほんとに高校時代にもどったみたいにお互いしゃべって、とっても楽しかった。フツと思った。こいつも変わったナー！昔のようにお互い話しているのに、何か変わったと思わせるようなものがあった。やはり、自分は気づかない中で、みんな周りは少しづつでも変わっていつているのです。ちょっと不安になった、オレは、他人から見ても少しも変わったと見られるだろうか。

年月は、人間を少しづつ変えていくものかもしれない。その流れにいか自分が努力してうまく回るかが肝心なのでしょう。毎年毎年秋になるとこんな事を考えているわけではないが、今年特にこんな事を考えてしまった。昔の友人は今、何をしているんでしょう。外国へ行ったヤツ、

働いているヤツ、遊んでいるヤツ、ガンバツテルヤツ、それなりにすごしているヤツ。僕は、僕自身昔の友人の誰にもまけないぐらい楽しくやっていたいなァー。

今年の秋の結論として、熱血する時は熱血する、ルーズにしてよい時はルーズしたい。でも、みんなになんらかの存在感のもたれる人間を指して、「ファイト」とまあいつてみよう。

戯言

人文学部 二年 石田陽子

とある都内のホテルで婚約発表の記者会見に臨む二人。

「彼女とは初めての広島遠征の時、渡辺君と食事に行ったお店で知り合いました。」

もう一度会えたらいいなと思っていたら会えたので……………」と彼。

「私は野球のことはあまりよく知らないんですけど、彼はスポーツ選手らしく、さっぱりしてて、とても素敵な人です。」などと言いながら記者会見を終え、三ヶ月後の挙式まで、花嫁修行にいそしむのであった。

これは、ノンフィクションになるはずですよ。

こんな空想ばかりしてる私に、周囲の人は、みなさん「しあわせな人。」と言って下さいます。やっぱり私は「幸せの星」のもとに生まれたんだわ。ふふっ。

「プロレス」

経済学部 二年 井上憲司

「カーン」ゴングが鳴った。

待ちに待ったIWGP優勝戦、ハルクホーガン対アントニオ猪木の試合が始まった。会場は超満員でうめつくされ熱気の渦に巻かれている。

リング内ではすでに肉体と肉体とがぶつかり合っている。

最初につかかっていったのはホーガンであった。

組みあっていた猪木の腕をねじ上げホーガンけりを入れた。

猪木がひるんだすきを見て、ホーガンここぞとばかりに責めまくる。

猪木に抜け出るすきを与えずそのままロープに振った。

猪木それをかわし、ホーガンにドロップキックを喰らわせた。

ホーガン一瞬ア然としている。

そのすきを見て猪木ナックルパートの連発、いわゆる猪木流の喧嘩殺法である。

この後、両者供相当のダメージを受けている。

ここで大きなダメージを与えようとした猪木、ホーガンに切礼の延随切りを見舞わせた。

しかしこれにビクともしないホーガン、逆にすかさず猪木をロープに投げこれもお得意のアックスボンバーをかけたいく。

しかし猪木これをかわした。

と同時に両者リングの外にもつれ落ちた。両者これまでのダメージによ

りなかなか立ち上がれなかったが、まずホーガンが立ち上がりついで猪木が立ち上がった。

危い猪木、ホーガンが猪木の背後からアックスボンバーを決めた。

これは決まった。というのも猪木が立ち上がった場所が鉄柱の側でアックスボンバーにより猪木の頭が鉄柱に打ちつけられたのである。

猪木その場に崩れ落ちた。

ホーガンはすでにリング上に上がっている。万事休す猪木起き上がれないか。

「猪木がんばれ！」会場の声を通じたのか猪木立ち上がり、エプロンサイドに登った。

再びそこでホーガンアックスボンバー、2発目である。

これは完璧に決まった。

猪木そのまま再びリング外に落ちた。

猪木これは完全にもうダウンである。

リング上では早くもホーガン勝ち名のりを上げている。

一方の猪木はリング下で大の字になり起き上がってこれない。

「カンカンカンカン」ここでゴングが鳴った。

ここで完全なる決着がついた。

判定はホーガンに罰歌があがった。

第一回 I W G P 優勝者はハルクホーガンと決まり、今腰に一億円のベルトが巻かれる。

猪木の三年越しの夢が今消え去った。

「猪木がんばれ」、またこれからがあるのだ。

また練習の積み重ねによって挑戦するのだ。

次に向かってはばだけ猪木ノ

ハレーの日

法学部 四年 照本英治

去年から今年にかけて、世界中で一大ブームが巻き起こった。言わずと知れた七十六年の周期で地球にやってきた、ハレー彗星である。彼がやって来ると言う、プロ・アマチュアの天文家は別にして、日頃、夜空の星等観た事の無い者達が、我も我もと眼鏡屋、デパートへと走った。そして、せっせと位置も知らずに夜空に天体望遠鏡や双眼鏡を向けては、「見えん」と言っ、すぐに飽きてしまった。所詮、日頃から星を眺める事無く、星座、惑星の位置も解からない奴が物珍しきで観て、見つかる理由わけがない。そして、ハレー彗星は、我関せずとばかりに星々の彼方へと旅立って行った。ところで可愛想なのは、物置の奥で埃をかぶっている、天体望遠鏡である。でもまだこれは良い方で、中には、ハレー彗星が行ってしまった途端に、質屋に持っていく者まで出て来る仕末である。特に質の悪いのは、小学生位の子供で、ハレーが来る時は、親に買ってこれとせがみ、ハレーが居なくなると折角買ってもらった望遠鏡に見向きもせずにスーパーマリオだ、グラディウスだと、ファミコンにうつつをぬかす。全く、困ったものだと思う。

だいたい、こうなる原因は、今の世の中にある様な気がする。確かに世の中、驚異的な速さで進歩している。その中で、新しい物がどんどん

出て来て、また皆がそれを欲しがり、そして購入していく。確かに生活は向上するし、余裕も出来てきたと思う。しかし、昔皆が持っていた大事な物を失くしていつている様な気がする。今の子供達が、独楽やビー玉なんかで遊んでいるのを見た事ない。ザリガニ釣りや、田圃のわらで遊んでいるのも見た事ない。今の子供達は、可愛想な気がする。もっと自然と触れ合ってもいいのではないかと思う。今回のハレー彗星の訪問は、いい機会だと思っただけど、その結果が前述の通りである。ああ、この先、どうなるんかなあ。オレの子供には、絶対、ファミコンとかさせんぞ。独楽やビー玉や、ザリガニ釣りを教えてやろっと。

七十六度後、ハレー彗星は、また地球にやってくる。その時まで、オレは生きてる自信はないから、ハレーよ、オレの代わりに、オレの子供達が何しようか見てくれよ。頼む。

道

商学部 三年 前田 秀樹

人にはそれぞれ生きる道がある。その中で自分の人生を変える様々なものにぶつかるだろう。その時、どこまで自分を見つめ、現実に向きかけることができるだろうか。

若いと言われながら、それでも時の流れは止めることができず、いつも動きつつづけている。このまま時が止まってほしい。こんな感情に縛られるときもある。考えてみれば、これは逃げであろう。やはりつき進むしかないのである。一人じゃないんだから。時の流れに身を任すん

じゃなく、自分から道を切り開いていけたらと思う。

「道」いつも走りつつづけていたい。

明日をめざして。

「書道部に入つて」

人文学部 一年 鶴原 哲英

高校の時からこの大学に入っても部に入ろうと決めていた。勧誘週間の時期になって友達と二人で歩いていたらいきなり勧誘された。制服を着たスポーツ刈りの二人の男が友達と僕の腕をとって「何回生の方ですか。」と聞いた。正直な僕は「一回生です。」と答えた。すると腕をとった手に力がいり「少林寺同好会ですが……。」。「しまった。」と思った僕は逃げだそうとしたが、友達がそのままに逃げ出し、それをのがした男が僕をつかまえていた男にかせいに来てもならなくなり勧誘場所まで行き話を聞かされた。その次の日はブラン、アーチェリー、新聞と次々に勧誘された。あんまりいい部にはみられなかったので「こうなったら自分で捜そう。」と思ひ歩いていると書道部があった。そして自ら入って、今書道部の一人としてゐるわけだが、入ってよかったと思つている。

部に入ろうと決めていた理由は、いい先輩をもち先輩を多くつくり大学生生活を楽しく過ごそうと思つたからだ。人文学部のクラスでの友達もできたが六十人中男は十七人だ。他の学部の人は女の子が多くていいと言うが、やっぱり男が多い方がいい。女の子もほしいとは思ふけれど

もその前に男友達を大切にしたい。もう書道部の人の顔と名前は覚えただが、四年生の方とはまだ余り話したことがないのでいつか飲みにも連れていってもらって話を聞かせてもらいたいと思います。

今はソフトボールの練習があつて、体が少しきついですが、書道部の人たちと交流を深め、又人文の友達とも仲良くつきあつて四年間の大学生活がいい思い出又よい糧となるようにしていきたいと思ひます。これからどうぞよろしく願ひします。

「これから」

薬学部 三年 正木 喜美子

信じられないけれど、もう三年生になっていました。期待と不安を抱いて、桜の木の下でおすまししていたあの時からすでに二年以上の月日が経過していったのです。

二年生になるときは、「誰でもなれる二年生」と、特別な気持ちも起こりませんでした。ところが、誰でもというわけではない三年生になることは、いろいろな意味で抵抗を感じました。「あと二年間もこうやって毎日が過ぎてしまうのだろうか？」etc.。つまり、二年間の大学生活の中で、学生の時間的・経済的空間に疑問を抱いていたのです。そして、実際三年生になって私を待ち受けていたのは強行なスケジュールでした。すると以前のような疑問は消えたものの、次に言いようのない不安感がムクムクと沸き起こってきました。薬学部の学生であることと書道部員であること。どちらも自分で選んだ道なのだから、へこたれ

やいけない。けれど両方の完璧を望めば望む程どちらも崩れてしまいうで怖いのです。気負いすぎずに、もっと楽しんでやればいいのですが、今後四年生に近づき、至ったときのことまで考えて不安に陥るといふ始末です。どうやら今後の課題は焦らず、慌てず、諦めず、ということのように思ひます。そして自分のことだけで手いっぱい、なんて人にはなりたくないと思ひます。

一言！

昔も今も変わらないもの。それは博多山笠と私の顔・体型。伝統っていいですよー

夏の気配

人文学部 二年 新開 祥子

ある時ふと、「こんな気分の方はあんな場所に行ってみよう。」なんて考えてみたり、一人それぞれ、気に入ってる雰囲気、好きな場所っていうのがあるんじゃないかなあとか思ったりするんですが、それはある人にとっては、港が見下ろせるこだかい公園であつたり、

夏のはじめの海々であつたり。

わたしの場合、それは、雰囲気的に稲垣潤一さんとか杉山清貴さんしてるところなど、曲のイメージにびったりな場所って、すごく好きです。季節感を感じれるところもいいです。

また、一見場違いに思えるようなところにポツンと立ってる喫茶店が、なんだかすごくいいなあって感じたり、雑踏が横断歩道を横切っている

ようななげない風景にひかれて、この雰囲気絶対いゝとか思つてしまつたり するんです。

場所とか雰囲気っていうのは、その中にある、人々にいろんなことを感じさせてくれるような気がします。着るものによつて気分が変わるように、まわりの風景が違ふと考え方、とまではいかなくても感じ方が変わつてくるように思います。たとえば、ざわざわした雑踏の中にいる時の、自分々と、自分以外に誰も見あたらないような静かなところにひとりいる時の、自分々々っていうのは、自分々々に対する捉え方が全く違つてくると思ふんです。また、同じことを考えるにしても、夜は妙にもの想いにふけて、朝は妙に現実的に単々と考えたりすることがあるようにまわりの雰囲気が与えるものつて大きいなあと思ひます。

自分の気持ちに雰囲気がびつたりな場所つてすごく好きです。おまけに、その雰囲気にびつたり曲が流れたりすると最高です。

最後にひとこと、灰色の階段をのぼつて、一面に広がる人工芝のグリーン、わたしの大好きな場所のひとつです。めーいっぱい夏、感じます。

僕の好きな中国

商学部 二年 北 本 正 範

よく日本人が、米国人化したと言われ体格的にも、生活水準的にも米
国並、又は、それ以上となっている。それにともない、社会問題に於て
も、米国化されているみたいだ。

つまり、完成された国家に於ける国民の創造意識の低下がそれである。

日本がこれからも米国式で行くのは構わないのだが、そういった欠点
とも思われる点すらも見習う必要はないと思える。

僕にして見れば、中国は、まだ資源にしても人材的にも、まだまだ未
開発であり、最先進国と呼ばれる日本の経済面、技術面と、限りなく純
粋で神秘的な中国との協力が、これからの日本の残された進歩に、つな
がる気がする。

そして、そのことは、最近の日中交友などの活発さからも、望み望ま
れていることから理解できる。

日中交友と、日中戦争当時の日本の軍部の目的は、ある点に於ては同
じかれないが、日本の将来は、中国をなくして存在しないぐらいにも
思える。

僕、個人的に言わせていただくと、中国人の持っている純粋さが、限
りなく好きで、生活水準は、日本が高いというのなら、中国は文化水準
が高いのだと、言いたくなるぐらい中国に興味がある。

例えば、中国には、良い書物、聖人と言われる人が存在し、今もお、
影響を与え人道的な国民色をたもっている。何よりも、すばらしいのは、
あの広々とした大地と、落ち着いた風景……………

ちっぴけな日本で、七転八起している今日この頃に、中国を理想化し
続ける僕の姿が……………。



性善之印



流光歎人勿疑詫



武谷成章約翰

アールグレイを モーニングコールに

商学部 一年 田中 香

その日、私はただならぬ物音で目を覚ました。それは、同じ書道部の山川からのモーニング・コールであった。「おはよう………」と言う間もなく、いきなり「あんた、なんしようとノクラブ始まるよ」「ガチャン………」そうです。ふと時計に目をやると、もう後五分でクラブ活動の始まる時間になるうとしているではありませんか……。私はダッシュで部屋まで駆けこみ、何事もなかったかのように平然と落ち着いて練習に勤しむのでした。

こんな私が書道部に入った動機は、ただ書道をこよなく愛していたから……。という理由で入ったわけではないのです。本当のところ、軽い愛好会みたいなものに入ろうノと心の底から思っていました。しかし、勧誘の時、先輩方の実に功妙なペースにまきこまれて、ひよひよいと入部してしまったのです。勧誘週間第一日に入部したのは、前代未聞だと言われています。しかし、私は書道部に入ってよかったと、つくつくそう思います。両親は、私が書道部に入ったことを大変喜んでおります。近所のおじさんも、「ほうーっ」と難しそうな顔をして感心しています。私はまるで天狗になった気分です。

クラブ活動は、今とても充実していて楽しいです。講師の赤木先生の素晴らしい墨書に驚嘆し、ますますがんばらねば……。……。

とこう意欲が高まってきました。入ったからには四年間一生懸命、頑張ろうと思えます。

“Christmas Time in Blue”

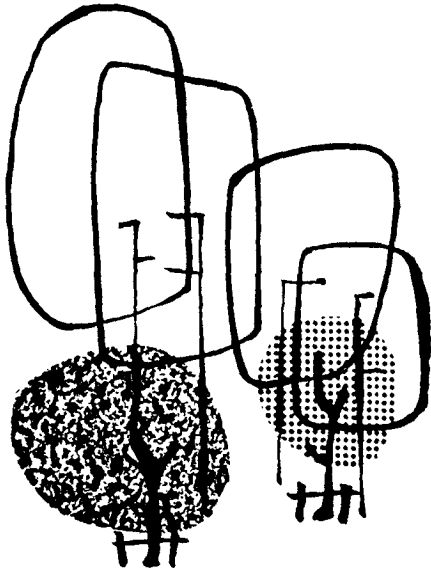
～現在に至る迄の一年間～

法学部 一年 桜井茂之

〈心はいつもヘビーだけど顔では大丈夫～〉そんな去年の続きの今年の始まり、1月1日AM0:00〈静かな冬のブルーに眠るこの街のNew Year's Day～〉佐野が声を張り上げた、いきおい受験を終え、発表され難多な日々の中でも〈～願いを込めてここに分けあいたい Let's stay together～〉春も終わる頃、彼はキャンパスの上で違う曲をやり始めた〈ポケットで吠え続ける哀れなフレイト～〉僕は自失していた〈見なれた景色の中で何かが違う気がする〉夏に突入する数分前に状況が僕の意識を暴走させた〈何かが間違っているのさいつの頃からか～〉〈分からない何も言えない〉〈街のため息も色あせて～〉〈～試されては消えて行く～〉等々、〈ミューズはもう戻らない〉その通ノ〈まともな暮らしが苦手だと誰にも言われない〉〈昔言われたHAHA(自嘲)〈所詮見せかけのジュエチャー〉だね、疑問は〈Yes, I'm in blue〉全てはいつにある、負けてとする気分はいつでも〈あの光の向うにつきぬきたい〉とか〈ただのスクラップにはなりたくないんだ〉なんてHAHA〈Bye Blue～〉とか、でも〈生活と闘ううすのろ〉はいるノ

〈いつも本心に欲しいものが手に入られない〉〈悲しみのほてに優しくな

る程優雅な気分じゃない)なんて事実認めるよ、うん。その上で僕は反旗を
ひるがえす、Happyな方向に、くうばわれたものとはとり返さなければ)依
り所はいつもくHappiness & Rest約束してくれた君)くてね(不確
かなエモーショナルな恋愛に愛えて風向を愛える Individualists)
そしてくBoyfriend Girlfriend 大切な Myfriend ~ たった
ひとつだけ残された最後のチャンスに賭けている Down Town Boy)
~聖なる夜に口笛吹いて。



僕は車です

人文学部 三年 石川 憲 喜

僕は自動車、名前はセリカと言います。生まれたのは、昭和五十年五月、もう十一歳になります。十一万五千キロ走り続けてきました。御主人は学生さんで、僕にとって三人目の御主人です。前の御主人も学生で同じ下宿にいたもんで、もう四年以上もここ、福大駐車場を寢床にしています。

今の御主人は、前の御主人みたいにあまり僕にかまってくれません。というのも、今の御主人は大学で書道部に入っていてそっちの方ばかりなんです。他の車はピカピカしているのに僕はいつもほこりだらけ、おなかはいつもペコペコ、オイルだって真っ黒。本当にドライバーとしての認識に欠けていると思うのです。

でも、御主人さんが書道部に入っているんで僕も色んな人と知り合いになれたし、色んな事をしてきました。部員の大半の人が僕に乗ってくれたし、なんせ連落ちを乗せることができるというんで、展示会の前には、乗用車なりに、しっかり頑張りました。やっぱり、利用してもらって、人の為になって、人に喜んでもらって、親しんでもらう、うーん、道具冥利に尽きますね。

こんな風に考えて、御主人の事を思ってみると、僕もあんまりわがままばかり言ってもらえないと思います。

御主人は言います。機械は嘘つかないから好きだ、と、でも嘘もつく

ことのできる人間の集団に一生懸命になっているところを見ると言いたくなるのです。御主人様、頑張り!!

気のきいた車を持って幸せです。(主人談)

「これから」

法学部 四年 田中 英樹

私が大学に入学し、そして書道部というサークルに入り四年目を迎える。現在に至るまで様々なことを経験した。

何もかもが新鮮だった一年生の頃、役員時代の二、三年生の頃。

苦しい時、悲しい時、楽しい時、うれしい時を常に感じる大学生活。

なにげなく大学に入学した私は、書道部、大学で多くのことを学ぶと同時に常に自分にとって書道部、大学の価値とは何であるかということを考えてきた。

現在の大学は、一部の学生を除いてレジャーランド化しているので各個人が物言の価値をしっかりと見極め、活動しないと流されてしまう。自分にとって何が必要なのか?、そして、これから自分は何をすべきなのか?ということ、常に自分自身の中で自問自答しながら前進しなければならぬ。

私はもっともっと、このことを早くから考えられたらと思う。なにげなく大学に入学した自分というものを大切にしていきたいと思う。

書道部には、大変お世話になった。書技面、人間関係に於いて、特に人間関係の面では、素晴らしい先輩・後輩達、共に悩み助け合い、喜びを

わかちあった同輩達に恵まれ本当に有意義な学生生活であった。

これからもっともっと、様々なことについて勉強し、幅広い人間にならなければならない。

常に向上心と血に飢えた狼のような目を持って、前進していこう。

「ひまな方だけ読んで下さい」

経済学部 一年 山下 直子

何を書こうかなあと考えて、ちょっとは考えてることを書いていたんですが、文章を書くのが下手くそで、言葉を並べると、ただのいい文となつて本当に伝えたいことが書けずに、うそっぽくていやなので、ある一日の私の行動をお伝えします。

その日は、久しぶりにとってもいいお天気でした。一限のある私は、九時頃家を出なくてはならないのに、目が覚めたのが、九時だったので。おっといけないと、飛び起きました。……ということもなく、のっぺり起きました。起きても三十分位は「ボーッ」としている私の横を、うちの母上が、「行ってくるよ」と、出稼ぎの旅に出かけました。苦勞をかけるねえと思ったりもしていない親不幸な娘です。そして、九時四十分頃、私の愛車ソアラ君と共に玄関まで来ました。今行っても、もう出席とるにしても間に合わないのと、私の中の小さな小さな(?)悪魔くんが私の足を止めてしまったのでした。

それから私は、この天気の中、どっかに行くしかないノと思いました。そして、そう故郷の……いや近所にある動物園に行こうと思いました。

ところが、こんな真っ昼間から人がいるわけでもなし、変な人がいたらいやだと思い、大好きなゾウくんやカバ君に会うことを断念しました。そして私は、あてもなく二時間も、テクテク歩きました。「やった、これで少しはやせたぞ」と思ったりもしましたが、その時には、私の口には、アイヌ君が訪ねてくれました。だから、ただ疲れただけに終わった散歩だったのです。

こんな話を読んでいただいてありがとうございます。楽しんでいただけましたか。

自由な日

経済学部 三年 白糸 林太郎

「自由だなあ」と思う時が最近あまりなくなってきた。もともとそんなにあったわけではないが最近本当に少なくなってきた。

バイクでフラリと走ってみることにした。もちろんそういう気持をとりもどす為である。

空が青かった。白い雲が流れていって、小鳥のさえざりや風のおいが大変こち良かった。頭の中はまっ白だ。自分自身が自然の一部になっている様な気持ちになる。

溪谷にたどりついた。別に行こうと思って行ったわけではないがなんとなく本当になんとなくたどりついたという気分だ。そこでつりをしていたおじさんに声をかけてみる。

「つれてますか」別に意図があつてはなしかけたわけではないが、ただ

こういう気分の時は自然に口が動いてしまうものである。「今日は、まだ一びきもつれんよ」気さくな感じの色の黒いおじさんは気持よくこたえてくれた。「いつもここでつりをするんですか」と聞くと「だいたいいこやけどもつと下流に行くこともあるよ。あんちゃんは、どこから来たかね」と聞かれた。「ええ福岡の方からちよつと自由な時間にひたりたかつたもんで」と答えるとおじさんは、なにげない口調でそれできてさとりを開いている様な口調で言った。「本当の自由とかこの世にあるんかねえ、カゴの中の小鳥が自由だと思ってるだけで本当の自由をもとめて外に飛び出したら生きるすべを知らずに死んでいく。人間の考える自由なんてそんなものじゃあないのかなあ」

おじさんと別れて家路についた。さっきおじさんの言った言葉が頭にこびりついてはなれなかった。頭の中ではそうじゃあないと思いつつも心の中では否定しきれない部分があつた。本当の自由が判らなくなつた。考えても判らない。でも考えずにはいられない。まあいいやと思つてねることにした。おやすみなさい。

クラリネットのひとり言

法学部 二年 中尾 明子

私はクラリネットである。正確な名前は、YAMAHA CLARINETのYCL-35である。しかし実際は「楽器」とか「クラ」とか呼ばれている。

私の主人はNという。今年で七年目のつき合いである。Nはクラリネ

ットを必ずしもメジャーで派手な楽器とは思っていないらしい。なぜなら、トランペットなどは野球場なんかで人目にふれることも多く、また色も金や銀とあり、音色も明るいからである。それに比べてクラリネットは色は黒、ちよっぴりうつむいて吹く地味な楽器である。しかし、私としては、この黒いボディに銀のキイというのは気に入っている。また、三オクターブも出るというのも自慢なのである。

Nは私は吹くとき、首を右に傾けて吹く。吹く時肩に力が入って疲れらしく、Nはよく「肩がこった」と言う。また十六分音符や難しいスケールを吹く時、私は一生懸命音を出してやるのだが、Nはどうも鈍いらしく、なかなかできない。そんな時Nは私に八つ当たりをする。私はむっとして、わざと音を出さない。Nは怒って、今度は自分の手に八つ当たりをする。しかし結局、練習の必要とパートリーダーの責任からメトロノームを相手に同じところを吹くのだ。そのうち私の気嫌も直り、また音を出してやるかという気になる。まあ、こんな下手な主人をもった自分の宿命だと思っている。

そして現在、私は隠居の身である。Nは今、フルートに挑戦中である。しかし、フルートを吹いた後、「私はクラリネッターだ」と言って時々吹いてくれる。そんな時、私としては、最善をつくしてやるのだが、Nはもともと下手な上、練習不足も重なりなかなか音が出ない。でも昔のように八つ当たりはしなくなった。そしてNは磨いてケースに入れてくれる。またいつの日か毎日Nが吹いてくれること信じてながら、再び私は部屋の隅に静かに置かれることになる。苦楽を共に過ごした五年間を忘れないで欲しい……。

気をつける

経済学部 一年 新納賢悟

皆さんは身のまわりに危険を感じたことはありませんか。危険を全く感じられていない方もあるかもしれませんが。そういう方に、今から書く問題を讀まれて、少しでも関心を喚起してくればと私は切実に願うのですが……。

ではどのような危険があるのかを簡単ではありますが私の知る限りのことを示していこうと思います。

第一、これは皆さんの記憶に新しいと思いますが、ソ連のチェルノブイリ原発事故による放射能汚染です。この長期的影響特にセシウム¹³⁷とヨウ素¹³¹から受ける被害は特別なものがあるのです。

第二、予測で生じるパニックです。これには、一つ例をここにあげてみましょう。それは、一九八二年から一九八三年にかけての富士山大爆発騒動があります。これは、気象庁に勤務したこともある気象評論家のたった一冊の著書より起こった騒動なのです。とても怖いことだと思います。

その他には、高齢化社会への急激な進行・化石燃料や樹木の不完全燃焼で生じるカーボン粒子の人体への悪影響・BALANCE OF

POWER (勢力均衡) の限界・人口増加と異常気象による食料事象の悪化・大気中の二酸化炭素増加による温室効果・水の中に含まれる物質の恐怖。

これらの危険はごく一部にすぎません。だから、皆さんも身のまわりを一度再確認してみてください。他にもっと危険な事が身のまわりにあるかもしれませんよ。

ではこの位で筆をおこうかと思えます。機会があれば、またこのことについてもっとくわしく書こうと思つてます。

桃子ちゃん

商学部 一年 木村 浩 太

僕は、生まれてこの方、二十年ほど生きてはいるけれど、今だ希望したことがなかった覚えは一度たりとない。実に悲しい真実である。(ただこの場合、その内容として、第一にサッカー選手になる。私はクラブの練習の時間に遅れぬよう家を出る。美しい妻にキスをもらう。そして、リンカーンに乗る、フム、ちょっとお待ちよ、私は下車して花に水をやる。すると花が心を込めて「有難う。」と言ってくれる。すると私は彼にこう言うんだ。「ケンカは嫌いだノ。いつか、そう、きつといつか君とアフリカIIサハラへ行こうノ。お供してくれるだろう。そうしたらさ、あの地を君の子供達でいっぱいにするんだ。その為に、俺は運河を探るよノ」てね。第二に、かわい子ちゃんと百メートルハードルを競う。ヨイドン、で二人は駆け出すんだ。僕の方が少し速い。それで彼女の為に、そう、まるで初めての陽光に照らされてはさかしそうにしてるヒヤシンスのような彼女の為に、僕は力を抜いたよ。ホラ、ね、するとどうだい、彼女、僕を置いてゴールしちゃったよ。何とも楽しい結末だね。

そういえば彼女、僕を抜こうとした時、ウィンクくれたっけかなあ……) てなわけで、ウーム、私は美しい。ヨハンIIクライフ

時空を越えて

人文学部 三年 真角 寛 子

時計の針が午前一時半をまわった。

家族は寝静まり、私は一人ぼつんと自分の部屋で原稿を書いている。

気分晴らしに雨戸を開けてみた。

皿倉・帆柱両山の麓の夜景が美しい。

九州自動車道を行き交う車のライトが目につる。三菱化成の煙突は絶えず煙を吐いている。目を転じて空を見上げると、北斗七星など、無数の星が輝いている。あの大空の彼方から超自然的な神々が私を見つめているような気がしてならない。又、このようにいつも思っている。もろタイムマシンがあるならば、日本の古代へ突入して、時の過ぎゆくままに身をまかせていたい。ドラエモンが実在していたらこの世はさぞ楽しいものになるだろう。

地球が出来て四十五億年・人類が誕生しておよそ二百万年になるが、もし、四十五億年が二十四時間だとすると、人類の出現は真夜中の前のほんの一分のところに位置するそうである。何と人類の歴史は短いのだろう。

その中のたった一個人なんか、鳥部山の煙々と等しいではないか。実際にここ数年、時間が加速度を増しているように思う。

夜更しをすると決まって過去のいろいろなことが走馬燈のように脳裏に蘇ってくる。

現在も過去になり、未来もすぐ過去になる。

この二年弱の時間を謳歌していくために一秒一秒を大切にしたい。

書道部に入部して

経済学部 一年 松山 浩 嗣

ぼくが書道部に入ろうと考えたのは、勧誘週間の前のことです。ある日僕と林が予備校時代の友達の所へ遊びに行った時、突然普通の人よりデコが広くて頭の大きいI先輩と、かわいい顔のK先輩(すいません)と、かっこいいK先輩が酒を持って乱入してきて、飲ませられて、気づいてみると入部届を書いていた。その日から、悪夢のような生活が始まった。書道というものをやったことがないので、最初のころは線が曲がったりして大変苦労した。今でもうまく書けないが、少しづつ筆にもなれてきました。練習はあまりおもしろくないけど、先輩方がみなさんいい人ばかりなので今のところ楽しく続けています。

特にデコの広いI先輩には、飯を食べさせてもらったり風呂に入れてもらったり(アブナイ)よく面倒を見てもらっています。それにデコの広いI先輩はお説教をするのが好きらしくて、僕たちによくお説教をします。説教するのがつかれたら、僕にマッサージしてくれといってよくやらされています。かけいで僕は上手になって老後の生活もなんとか暮らしていけそうです………というのは冗談ですけどこれからの大学生活楽

しくやっついていけそうです。書道部に入ったからには、四年間続けて頑張っていこうと思います。

振り返って

商学部 四年 山本 順 一

気が付けば季節は秋である。ようやく就職も決まり学生生活もあと半年を残すのみである。この四年間、クラブに明けクラブに暮れたような気がする。この四年間を自分なりに振り返ってみると……。

「俺クラブやめます。」

一年の時、一週間に一回は、先輩に言っていたような気がする。四年の某先輩に酒を飲まされ、その度にだまされ、だまされ残ってしまったが、気がつけば四年である。

役員

結局三年間、役員をやったが役員中が一番である。確かに頭を使い、体を使い、気を遣い、お金を遣い、時間を遣う。だがこれほど自分に残るものはない。後輩諸君、チャンスがあれば役員になれる。得する事はあっても損する事は絶対でない。

オリンピア

最高につらくて、最高に楽しい場。かつて、同輩だと思っておどかしたところOB山村氏の顔があった。冷汗。

書道

一、二年筆を持つのも嫌だった。必要なのは何かのきっかけである。

「僕は、先輩が嫌いです。」

一年の時、若げのいたりとはいえ、その先輩に直接言った事があった。自分が先輩になって始めて先輩の気持ちがわかった。嫌いな先輩は居ても、嫌いな先輩は一人も居ない。これは、どの上級生も同じである。

講義

出なかった。後悔先に立たずではあるが……。親の顔が頭をよぎる今日此頃である。

下宿

何人がこの部屋を訪れ、汚していったらどうか。「ユース田島」「喫茶山本」など、ありがたい呼び名をもらったが、本当に楽しい空間であった。

日本間

言わずと知れた我々の練習の場である。正座したり、プロレスなどは決断してすることはない!

酒

一年の頃、飲み会Ⅱつぶれるだけだった。本音が出るのが好きである。酒は飲め飲め……。

書心会

もうすぐお世話になる訳だが脅威である。それにしても柴田会長宅で御馳走になったお鍋のおいしかったことは忘れません。

同輩

朝も昼も夜も一諸に居たのでそれぞれが夫婦みたいな存在である。先輩諸君は信じられないだろうが一年の頃、怪物なような彼と僕

は一番仲が悪かった。わからないものである。四年間で得た最高の財産、それが同輩である。

長々と書いてしまったが、まだまだ語りつくせない。この四年間、クラブをやつてよかった。最高やった、と今胸を張って言える。先輩のみんなも後悔のないよう精一杯頑張つて欲しいと思う。

福岡大学芸術文化部会書道部……大好きです。

『いい人に、逢えるさ』

理学部 二年 西本 祐介

歩道橋で黙りこんで、君は見てたね。

濃んだ夏に横たわる、町のざわめき。

小手先で生きられない、不器用なやつ。

「時代遅れ」

と言われても、君であればいい。

もう誰も、本気で夢など見ない町で、

荒ぶる情熱、君のまま胸に、消さずについて

若すぎてたあの頃は、知らずにいたね、

自分を満たす高ぶりに、溺れていたから。

傷つく程愛せたら、素敵じゃないか、

「自分のために、愛した」

と、悔むよりは、いい。

「いい人に、逢えるさ」

ありふれた、台詞だけど。

信じていたいね。

「わかりあう誰か、そばに居る。」と

同じ黄昏、胸にしてみても、

癒せない寂しき、君だけじゃない。

「いい人に、逢えるさ」

せめて胸の片隅

感じていたいね

「いつの日も、君は、独りじゃない」

料理人の心

工学部 三年 木下 晋

昼休み、学生が食堂に集まり、今日は何を食べようか。これは昨日食べたから今日は……」などの声が聞こえる。

大学のまわりには、学生相手の飲食店が数多く存在している。長い間ずっと存在する店、数ヶ月で存在しなくなる店、様々である。当然、長く存在している店は、学生がよく通う店なのだろうが、何故、足を運ばせる事ができるのかと考える。例えば、料理がうまい、値段が安い、メニューがバラエティーとか、雰囲気が良いとか……、その他いろいろ

挙げられるだろう。しかし、以上のような事の基を創っているのは、料理人の心ではないだろうか。料理する人にとれば、初対面の人が、この店にまた来たい」と感動させる物がなくてはいけない。そのために料理する人が考えるのは、相手（客）の事であろう。この店にまた来たい」と感動させるために……。

昔、料理人の生き様を書いた本を読んだ事がある。この料理人は、料理を芸術の域まで行かせようと努力していた。その料理人が、こんな言葉を書いた。料理を芸術の域まで行かせるためには人を感動させなければならぬ。そして、人を感動させる事ができるのは、人の心の他にない」と。今でもその言葉は、自分の頭の中に大きく残り、自分の生き様の基になり、自分の夢になっている。その夢にこだわり続け、努力し続ける。

こんな事を考えるにも、食べ物から離れられない自分は、食いしん坊なのでしょか？食いしん坊ですね。どうも御馳走様でした。

今頃、思うこと

商学部 一年 滝 匡由希

最近、妙に寂しい。何だかわからないけれど、とても寂しいのだ。なぜ、こんなに寂しいのかと考えてみても、答えは出ない。普段と全く変わらない生活をしているのに。冬という季節だからだろうか、いや、そんなセンチなことではないようだ。顔には現れないのだが、とても、せつないのだ。

いつからだろう、こんなに感じるようになったのは。書道部に入部したばかりの頃は、こんなに感じることはなかった。むしろ、練習時間の、あの静けさ、あんな雰囲気、たまたまなくよかった。でも、近頃は、静かすぎるだけ、よけいに気が沈んでしまう。こんなに寂しく感じるのは、僕だけだろうか。しかし、クラブに出て来ると、声をかけてくれるし、指導もしてくれる。それに、みんなが楽しくやっているようで、僕の気もまぎれるのだ。クラブ活動は、僕にとっては、大きな存在だと言える。一体いつまで、こんな寂しさが続くのだろうか……。

以上、僕のひとりごとでした。

初 心

商学部 一年 山川 ゆり

福岡大学に入学して、はや一か月が過ぎました。あつという間の一か月でしたが、いろいろなことがありました。

一番の出来事は、こんな私が「書道部」に入ってしまったことです。

最初は、体育実技が免除になる体育部に入ろうかと思いましたが、やっぱりきついものに耐えられない性格のなせる技か、かわいいサークルにでも、うもれてしまおうと思っていました。そして友人（知る人ぞ知るタクミ）がフォークソング愛好会に入ったので、それに便乗しようかとも思いました。そんなような勧誘週間の初めの日、あれよあれよという間に書道部に入ってしまった。あの時、ジャンケンにダンス愛好会が勝って、あちらに勧誘されていたら、私は書道部に存在しなかった

かもしれせん。それどころか、どのサークルにも入らないで、大学と家をただ往復するだけのつまらない生活を送り続けてしまいました。ジャンケンに勝ってくれた先輩ありがとう//ございました。

授業開始の日からクラブに入るなんて、自分でも少し驚きました。でも、そのおかげで自分の固かったはずのある決心は、もろくも崩れ去ろうとし、だんだん書道に対しての欲が現われようとしています。初めて赤木先生の墨書を見た時の、大変な衝撃と感動をいつまでも忘れずに、書道が続けたいと思います。新たな、私の決心。

ポピュラー

経済学部 四年 瓜生 達哉

明日は早い、遅れては一大事である。起床時刻にタイマーをセット。いい夢見ろよノシッカリ最後まで見て、目覚めは正午。

時すでに遅し、軽快なリズムにのせて目覚まし代わりにのホール&オート、マンイーターが今ごろ聞こえてきやがった。

演 歌

街外れの小さな料理屋。二階の狭い座敷には若者達がぎっしり。代わる代わる立ち上がっては恒例の一气コール。

「先輩、もう飲めませんよー」と言いつつコップを持ってはまた立ち上がる。ゴクリと飲みほし、割りばしをマイクに唄うは、水雨

うつろな目にみんなの手拍手する姿がかすかに映った。

クラシック

映画『白い家の少女』。暖炉を前に少女と男。すり替えられた毒入りの珈琲を口にして苦しみ倒れる男。暖炉の炎に少女の長い髪が映える。BGMに彼女の好きな「ショパン・ピアノ協奏曲第一番」なぜか俺を悲しい気分にする。

歌謡曲

「恋のロープをほどこいちゃ……」とテープに合わせて鼻歌まで出るこの余裕は右手に握ったパイにある。

「リーズモドラ五、親バネ、一万八しえん」、またもやでた恐怖のドラ麻雀。思わず顔がほころび、点棒を集める手もいきいき。

しかし、チャンスの後にはピンチ有り。箱いっぱい点棒を数えながら呟く。「つきのロープをほどこかないで」

JAZZ

雨上がりの国道。水溜りに反射する対向車のライトが眩しい。慌しかった今日一日の疲れをいやすが如く、煙草に火をつけた。

この一服、そして聞こえてくるアート・ペッパーのアルトがすべてを忘れさせてくれる。

今……

工学部 四年 尾崎光義

私が福岡大学芸術文化部会書道部に入学し、もう四年間が経過しようとしています。ただ何となくこの部に入り、別に書が上手になろうとはこれっぽっちも思わなかった私が、時が経つにつれて身の回りの人達を、

書道という面で敵にまわし、それからというものは、市展、県展を中心にその他数多くの展示会に向けて私なりによく練習したものだ。（だが展示会は落選ばかり）私が一、二年の頃は、先生が書いてくれた手本をまねるのは得意中の得意であり、これが上手になる近道であると思っていた。しかし、先生の手本に頼らずに何か作品を書こうと思い、試みると、これがまた見られたものじゃない。いつも先生の手本を書いて、ほうこれはうまい、誰だ？と言われていたのが、自分自身で作った作品を見せると、こりゃいかん誰だ？と言われる。どうしていけないんだ、なぜなんだと考えると、日頃の練習方法が悪いのではないかと思う。私一人だけかもしれないが、先生に書いてもらった手本をただまねる事だけに一生懸命になり、自分の感性や発想能力などが磨かれずに、何か書いた際に、へったくそなものしか出来ない。それに気づいてからは、先生の手本や法帳の臨書を生かしても自分自身で作ることに勤め、先生に見てもらい指導してもらおう事を望み、先生もそれを望んだのだと私は思う。

先生の家にはよく足を運びいろんな事を相談し、そのあとはいつも自慢のものを聞かされた。いや、聞かせて頂いた。役員の時、一人づつ顔と名前が一致するようにと写真を撮ってもらったり、夜遅くラーメンを食べに連れていってもらったりと、すべてが私のいい思い出です。私は先生に書道だけではなく、その他多くの事を学ばせて頂いたと感謝致しております。

有難うございました。

後輩達を今後共宜しくお願い致します。又後輩、先生に甘える事なくついてゆけ。

最後にいろんな出逢いを与えてくれた福大書道部よ有難う。

原 通幸先輩さようなら ……



故 原 通幸先輩

冬の寒さを感じさせない暖かい日、部屋に信じられない知らせが届きました。原 通幸先輩の死去です。初め自分の耳を疑い、原先輩は病院で療養され、元気になられているはずなのに……。そんな思いが頭を横ぎっていきました。こんな風に確信していたのも原先輩の、零から書道部を創り上げられ、発展させられた情熱と志でした。自分たちはその時代に生きておらず、全容を理解する事は量りしれない領域ではあるでしょうが、自分たちは、原先輩の志が生きる書道部で多くの事を学ばせて頂いております。そして、原先輩の情熱と志に負けぬよう、精進していきたいと思います。

ただ、今、我々は、原 通幸先輩の御冥福を御祈りすると共に、「ありがとうございました」との気持ちでいっぱいです。

最後になりましたが、荒鷲記載に当に、貴重な弔辞を拝借させて頂きました原勢津子夫人に深く謝意を表します。

第二十六代幹事 木下 晋

弔 辞

謹んで原通幸君のご霊前に申し上げます。

奥様の手厚い看護の甲斐もなく逝去された原君。

君は享年四十六才の働き盛りでした。再起を信じていた私達にとって君の訃報は悪夢としか言いようがありません。こうして君の霊前に立っていても、こんな馬鹿なことがあるかとの思いです。

君を又と得がたい我が友として親交を始めて二十有余年、数々の思い出を抱きながら君に惜別の言葉を述べなければならぬ事は我が身を切られる以上にとってもつらい思い出であります。

二週間程前に見舞に伺った時は、四月の新学期からは普通校の責任者として頑張る為に、一生懸命養生するんだと仕事に燃えていた君。

病魔に蝕ばまれ、激痛が襲い一日中眠ることの出来なかったのに一度も弱音をはかず、強固な意志で病氣と戦っていた君、君は、福岡大学在学中私達と一緒に書道部の創立に青春をかけたネ

あの頃は大学も部の創立ラッシュで雨後の竹のこのように名乗りを上げており、書道同好会を他より早く部に昇格させる為、私達は君を学文会 of 役員に送り込みましたが、君は学文会でも指導的な役割を發揮され、数が限定されていた部の昇格が認められ現在の書道部があるのは君の努力があったからこそです。しかし今思えば全てが初めての事ばかりで、どうしたらよいか、よく二人で夜遅くまで話し合い、又部の運営に行詰まり二人で泣いた事もありましたネ。

同好会創立後直ぐに書道界ではあまりにも有名になりました、西日本高等学校揮毫大会も君の発案、企画で始め、昨年は二十六回の歴史を刻むまでに発展しました。

君はこのような、大きな大会に満足することなく、福岡学生書道連盟、九州学生書道連盟、福岡大学書道部OB会と次々に発足させ、福岡大学書道部の基礎を作ってくれました。

このように君が二十数年間に残された功績は私達が受け継いでさらに後輩達に引継ぎ大きく発展させる事を約束します。

しっかりと家庭を守ってくれた奥様達を遺された君の御無念を思うとき、如何に天命とはいえ、神仏の非常に憤りを感じるのであります。

しかし、君のお子さん達は、君に似て立派な社会人になることでしょう。微力ではありますが、私達で心を合せて、ご遺族に対して出来るだけのお手伝いをさせてもらおうつもりでおります。

本日、ここに友人一同、君の霊を弔い、在りし日を偲びつつお別れを申し上げます。

原通幸君 さようなら

昭和六十二年二月一日

友人代表 柴田 一夫

福岡書芸院

月刊書道研究誌

「遠」發行

古典と中心と
専門的指導

福岡書道専門学院

会長

前崎南嶺

〒816

福岡県大野城市白木原23-2

電話 092 573 5753

掛軸、額縁、屏風表装一式 萬年堂

〒814 福岡市城南区鳥飼 4 丁目 1 - 39
TEL (092) 8 2 1 - 7 7 6 7

福大生の
いこいの広場

ボウリング
ゴルフセンター
バッティングセンター
卓球センター
ビリヤード
ゲームコーナー

レストラン風月(七隈店)
音楽喫茶(もみの木)
雪印スノーピア
1時間仕上げ DPE (七隈店)
コピーコーナー
各種文化サークル

七隈ファミリープラザ

〒814-01 福岡市城南区七隈 8 丁目 4 番 8 号 ☎092(861)5555

☑特別会員の結婚式、披露宴、
同窓会などご計画の折は、お
得な特典が使えるガーデンパ
レスでどうぞ。



私立学校教職員共済組合九州会館

福岡市中央区天神4-8-15・日本銀行ウラ
(駐車場30台収容)



わたし、私立学校を卒業しました。

福岡県内の大学・短大・高校の校章です。

●お申込みお問合せは…福岡・天神

☎(713)1112

プライダルコーナー直通 ☎(752)0562

おふくろの味 お持ち帰り寿し・弁当・丼物

花 す し 弁 当

サウンド音の木ななめ前 TEL 864-5348

合宿用寝具類の専門店



貸ふとん

つるや

TEL 521-6565

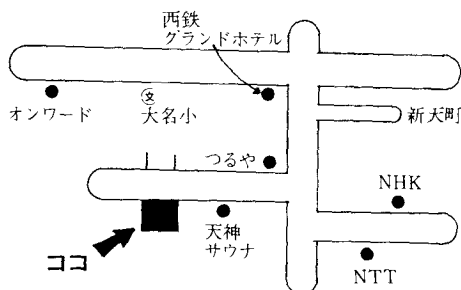
福岡市中央区薬院3丁目10-10

祝 福岡大学書道部創立25周年

とにかく1度立ち寄ってみませんか!?

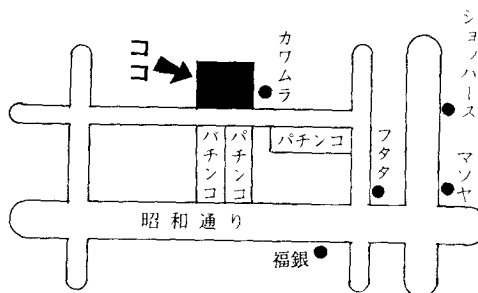
今、噂の焼とり・居酒屋!!

〔権兵衛館大名〕714-2296



70人様収容

〔権兵衛館てんじん〕761-2684



150人様収容



コーヒーハウス

北 欧

福大バス停前 TEL 871-6232

味自慢 卸かまぼこ 造って売る店

上田蒲鉾店

福岡市中央区六本松 電話(741)7109

筆・墨・硯・紙・書籍

中国書道用品・展覧会の搬出、搬入

■駐車場有り

株式会社 平助筆復古堂

福岡市中央区春吉3丁目3街区9号

TEL(761)5122・(761)0884

お食事処

よかろうもん

〒810 福岡市中央区渡辺通り5丁目
TEL(092)711-7900

額・表装一式

菊池晚香堂

〒810 福岡市中央区六本松3丁目12-24
TEL (092) 741-0897

とにかく1度立ち寄ってみませんか!?

就職指導, 国家資格指導機関

九州学生相談センター

相談室 〒812 福岡市博多区東2-17-5
(モリメンビル4F)
TEL (092) 473-8943 (代表)

2輪用品専門店

RED SUN
RIDERS' GOODS

福岡市南区長丘3-9-8
吉海ビル1F
092-551-4310

お食事処

大 吉

(福岡大学バス停前)

※クラブ・各種弁当予約承ります

TEL 864-0134

福岡本店 092-566-1911
北九州営業所 093-661-5541
東営業所 092-622-2190

合宿にクラブ活動に電話一本で

寝装リースのレンタル **丸屋**

和漢文房舗 **硯 山**

〒810 福岡市中央区天神3丁目5番23号
電話 (092) 721-1644 (代表)

福岡大学学術文化部会書道部

規 約

第一章 名称及び目的

第一条 本部は福岡大学学術文化部会書道部と称し、本学学生による書道愛好者の団体である。

第二条 本部は部員相互の親睦融和をはかり、人間形成を目指すと共に書道文化の普及、書技の向上を目的とする。

第三条 本部は前条目的を達成するために次の事業を行なう。

一、書道に関する事業

一、書道に関する調査並びに機関誌などの刊行

一、関係団体との親睦ならびに連絡提携

一、各種展示会出品

一、その他前条目的達成のため必要と認めた事業

第二章 組 織

第四条 本部は講師及び部長各一名を置く。

第五条 本部は幹事、副幹事、会計、企画、庶務、渉外、その他必要とする役職を置き、本部を代表する。

第六条 本部は次の機関を置く。

一、役員 会

一、部員 総 会

一、O・B会、但しO・B会規約は別に定める。

第三章 役員 会

第七条 役員会とは、部の円滑なる運営を期するための機関である。本会は原則として、第五条に基づく役員によって構成される。但し、第五条に基づく役員以外であっても幹事が認め

た場合には、本会に出席することが出来るが議決権はないものとする。

第九条 本会は幹事によって召集され代表される。

第十条 本会は毎月一回開くことを原則とする。

第十一条 本会の議決は、部員総会の決定を妨げるものではない。

第四章 部員 総 会

第十二条 本会は本部の最高議決機関である。

第十三条 本会は本部の部員によりこれを構成する。

第十四条 本会は必要に応じこれを開き、幹事がこれを兼務する。

第十五条 本会の議長は原則として、幹事がこれを兼務する。

第十六条

一、本部会は部員の過半数をもって成立する。

一、本部会の議決は出席者の過半数の賛成を必要とし、可否同数の場合、幹事がこれを決定する。

但し、出席者の過半数の賛成で重要事項とし、その決定

には出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

第六章 役員 の職務

第十七条 本部会不成立の際、出席者の三分の二以上の賛成をもって

第二十四条 役員 の職務は次の通りである。

仮議決することができる。但し、

一、幹事は部務を処理し、部を統括する。

一、仮議決については事後部員総会に於いて過半数の承認を必要とする。

又、部の代表責任者であり、その責任を学術文化部会と部全体に負う。

一、重要事項は仮議決することはできない。

一、副幹事は幹事を補佐し、幹事に支障ある時はその任務を代行する。又、福岡大学書道部OB会の事務を担当する。

第五章 役員

第十八条 役員構成は第五条に同じ。

一、企画は第一章第二条に定められた本部の目的にそつて諸活動を企画する。

第十九条 第三条につき、外部関係諸団体へ役員を派遣することができる。

一、庶務は本部の活動に必要な諸事務を行ない、資料の徴収保管をなし、機関誌の発行を行なう。

第二十条 幹事は本部を代表し、副幹事は幹事を補佐し、幹事に支障ある時はその職務を代行する。

但し、機関誌の発行は年一回とする。

第二十一条 本部の役員改選は選挙制にし、これを重要事項と認め部員の無記名投票による選挙を行う。

一、第五章第十九条に基づく役員は、本部関係諸団体との親睦融和を図り部の向上を目指す。

但し、委任状は認めるが、委任の方法は年度によって異つても良いものとする。

第二十二条 本部の役員 の任期は四月一日より翌年三月三十一日までとする。

第七章 会計

但し、役員改選後、翌年三月三十一日までは代行期間とし、

第二十五条 本部の会計年度は四月一日より翌年三月三十一日までとする。

その責任は新旧役員 の連帯責任とする。

第二十六条 本部の部費及びその他の所定納入金については、前年度末に部会に於いて決定しなければならない。

第二十三条 役員改選は原則として十月に行なう。

第二十七条 会計報告は会計が行なう。又、部員の要求に応じて会計簿を公開し、年一回決算報告書を作成し、これを報告する。

第八章 部員の権利義務

第二十八条 本部の部員は次の権利を有する。

- 一、本部のあらゆる活動に参加し、人間形成の場として利用すること。

- 一、本部の役員総会に出席し、その議決に参加すること。

- 一、本部に於ける選挙権、被選挙権を有する。

- 一、本部の備品及び図書を利用すること。

第二十九条 本部の部員は次の義務を負う。

- 一、部員は部員総会に出席すること。

但し、やむなく欠席する者は事前に欠席届を幹事に提出しなければならない。

- 一、部員は部員その他の所定納入金を定期に納入すること。

- 一、本部の規約に従うこと。

第九章 入部・退部

第三十条 本部の入部は年度始め募集することを原則とし、学文会登録及び入部金納入をもって部員とする。

本部の退部は書面をもって幹事に願ひ出て、役員会の承認を得、部員に通達する。

但し、退部を希望する者は、その在籍期間までの所定の納入金を完納する

第三十二条 書道を研究する熱意なく本部の名譽を汚したる者、部活動を理由なくして一ヶ月以上怠った者。又、部の秩序を乱す者は部より除名する。

但し、欠席届出者についてはこの限りではない。

第十一条 規約改正

第三十三条 本部規約改正の発議は部員総会に於いて部員の四分の一の同意により総会の議決を経て行なわれる。

尚、改正においては、本部員の三分の二以上の出席を必要とし、その出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

附 則

附 一 本規約は、昭和三十五年より実施、昭和四十五年四月一日改正。

第十章 罰 則

福岡大学書心会

規 約

第一章 総 則

第一条 本会は福岡大学書道部書心会と称する。

第二条 本会は事務局（本部）を福岡大学書道部に置く。

第三条 本会は支部を置くことができる。

昭和五十六年一月一日
改正 昭和五十九年一月十六日
昭和六十一年一月一日

第二章 目的及び事業

第四条 本会は会員相互の親睦を図り、書道文化の普及、向上に努めると共に福岡大学書道部の後援を行ないもって軌道に貢献する事を目的とする。

第五条 本会は前条目的達成の為次の事業を行なう。

- 一、書道の振興に関する事業
- 一、書道に関する研究物、機関誌等の刊行
- 一、関係諸団体との親睦及び連絡提携
- 一、各種展示会出品
- 一、其の他前条目的達成の為必要と認めたる事業

第八条 本会は次の各号の役員を置く。

- 一、会長（一名）
- 一、副会長（若干名）
- 一、評議委員長（一名）
- 一、副評議委員長（三名）
- 一、評議委員（原則として各代一名とする）
- 一、事務局次長（一名）
- 一、事務局委員（若干名）
- 一、会計監査委員（一名）

第四章 役員

第三章 組 織

第六条 本会正会員は福岡大学書道部員として登録をなし卒業をした者をもって構成する。但し強制するものではない。

第七条 本会に總會、評議委員会、および事務局をおく。

第五章 役員 の 職 務

第九条 本会の役員は次の職務を行なう。

- 一、会長は本会を統轄し、且つこれを代表する。
- 一、副会長は会長を補佐し、会長に事故ある時は、その職務

を代行する。

一、評議委員長は、評議委員会を統轄し、且つこれを代表する。

第十六条 本会総会議長は書心会長がこれにあたる。

一、副評議委員長は、評議委員長を補佐し、評議委員長に事

第七章 評議委員会

故ある時はその職務を代行する。

第十七条 本会の審議および決議機関として本委員会を置く。

一、評議委員は書心会の本会の運営、重要事項の審議および決議にあたる。

第十八条 評議委員会は評議委員、事務局長、および事務局次長をもって構成する。

一、事務局次長は、事務局を統轄し、且つこれを代表する。

第十九条 評議委員は次の各号の場合、評議委員長がこれを召集する。

一、事務局次長は、事務局長を補佐し、事務局長に事故ある時は、その職務を代行する。

一、会長が必要と認めた場合
一、評議委員長が必要と認めた場合

一、事務局委員は、本会の企画・立案にあたる。

第二十条 評議委員会の成立、並びに議決は書心会総会に準ずる。

一、会計監査委員は、本会の会計監査にあたる。

第二十一条 評議委員会議長は評議委員長がこれにあたる。

第十条 役員任期は二年間とし、定例総会に於いて選考するものとする。

第八章 事務局・会計

第六章 総 会

第十一条 総会は本会の最高決議機関である。

第二十二条 本会の執行機関として、本事務局を置く。

第十二条 書心会総会は会員をもって構成する。

第二十三条 事務局内に事務室を置き、書道部役員より、事務室長を選任する。

第十三条 本会総会は次の各号の場合、書心会会長がこれを召集する。

第二十四条 本会の会計年度は毎年一月一日より始まり、十二月三十一日に終わる。

一、定例総会（年一回）

第二十五条 本会会費は総会に於いて決定する。

一、会長が特に必要と認めた場合

第二十六条 会計は監査を受け、総会においてその年度の会計報告を行う。

一、評議委員会が必要と認めた場合

第十四条 本会総会は出席会員をもって成立する。

第二十七条 会員は本会運営費用として毎年三月三十一日までに会費納入の義務を負う。

第十五条 本会決議は出席会員の過半数を必要とし、同数の場合は議

第九章 入会及び退会

第二十八条 入会については、第十七条に該当するもので且つ、本人の申し出によるものとする。

第二十九条 本会をやむをえぬ事情の為、退会する場合は書面をもってすみやかに申し出る事。

第三十条 本会を退会し、再入会の申し出があった場合、評議委員会の承認を得た者について入会を認める事がある。

第三十一条 本会で本会の名誉を毀損し、また会員としての体面を汚し、もしくは不都合な行為があった場合、総会の決議により退会を命ず。

第三十二条 二年間会費を滞納したものに於いては退会を命ず。

第三十三条 本会規約の改正は評議委員会の審議を経て総会出席者の三分の二以上の賛成を得なければならない。

第十一章 附 則

第三十四条 本規約は、昭和五十九年一月十六日から施行する。

◇◇◇ 編集後記 ◇◇◇

二十六代の集大成「書心・荒鷲」が完成しました。この一年間の活動を写真、エピソードを織りませ書道部の足跡として掲載しました。この一年間の足跡をこれからの書道部の糧としてより一層書道部が発展する事を強く切望します。最後に御協力頂きました関係者各位の方々に対して部員一同感謝し、心より御礼申し上げます。

白 糸 林太郎

「書心・荒鷲」

第二十七号

福岡大学学術文化部会書道部機関誌

昭和六十二年三月 発行

発行責任者 木下 晋

編集責任者 白 糸 林太郎

発行所 福岡大学学術文化部会書道部

〒八二四一〇一 福岡市城南区七隈八一十九一

電話 八七一〇四七二

印刷所 井上印刷(株)